

Japan Society of  
the Graded Direct Method  
and Basic English

No. 69

Year Book

2017年6月

発行：GDM 英語教授法研究会／日本ベーシック・イングリッシュ協会 編集：伊達民和

東日本支部 〒226-0005 神奈川県横浜市緑区竹山3-1-8-3102-233 加藤准子方 Tel/Fax：045-934-8314

西日本支部 〒567-0034 茨木市中穂積1-5-B-605 此枝洋子方 Tel：080-8167-1993

<http://www.gdm-japan.net/>

巻 頭 言

伊 達 民 和

「使える」英語—特に話せる英語—重視の風潮にあつて、それと対極にある考え方は、多読の効用である。故・国弘正雄は、只管朗読を勧めた。「只管(しかん)」とは「ひたすら」という意味である。これは、仏教、特に禅宗での只管打坐をもじった国弘流の造語である。夏目漱石も多読の効用について書いている(詳細は、川島幸希著『英語教師夏目漱石』新潮選書)。ついでながら、巷間では漱石は英会話が苦手であった故に、留学中にノイローゼになり帰国を余儀なくされたと言われているが、彼は、当時のロンドン訛り(コックニー)に悩まされた。John Honey 著 *Does Accent Matter?* (1989) によれば、ブリテン島で話される英語の訛りの中で the least prestigious accent はロンドン訛り(コックニー)である。杉本良夫(社会学者、ラトローブ大学〈豪州〉名誉教授)は、「最近では初歩や中等程度の英会話が出来た人がずいぶん増えてきた。しかし、英文で筋道の立った文章を組み立てる訓練が欠けている。簡単な会話はできるがまとまった文章は書けないというのが現実に近いのではないだろうか」(朝日新聞 2000, 4/14)。まとまった英文を書く力は、「只管多読」から生まれる。今日、日本の英語教育界を席卷しているように思える検定試験の高得点者の中には、こなれた文章力と会話力が備わっていない人たちが少なからずいるという陰口をよく耳にする。実際、business English 一辺倒では味気なく、もの足りない。人間の感情の機微を扱った human interest stories—例えば、通俗小説—の多読を是非ともお勧めしたいと思う。

内 容

巻頭言	伊達 民和	1
EP あれこれ	片桐ユズル	2
代名詞の指導順序の重要性～GDM と教科書を比べて～	松浦 克己	4
主体的な学び・対話的な学び・深い学びと GDM	磯野 秀仁	11
大人のクラスの GDM と Basic English	多羅 深雪	18
Plants in the Winter	唐木田照代	21
小学生を対象に実施した GDM 教室の記録		
A Record of my Home Teaching Class for Elementary School Students	合川 麻由	23
PIE (印欧祖語) の Etymon (語根音形) から把握する Basic 語彙と英語の Lexicon	後藤 寛	31
plain English について	相沢 佳子	47
読み物		54
活動報告 (東日本支部&西日本支部)		57
編集後記		60

## EP あれこれ

片桐 ユズル

EPの教え方として最近はやりの方法のひとつとして、a/theを教えるにあたって、Book 1のテキストの順番どおりに、p.10 dの“This is a hand. These are the fingers. This is the thumb.”からはじめるというのがある。むかし吉沢美穂さんはこのわくは無視して、“This is my/your/his/her...”から始めることを、すすめていた。Learnersの頭のなかで、“This is a”が一つのかたまりになって、“This is a my hat.”のような発言があらわれるのを防ぐためであった。最近わたしは月1回×5回で“of”まですつとばす10人ほどの社会人クラスをやってみたが、やはり“This is a my bag.”があらわれた。というわけで、わたしはむかしの吉沢流でいくことにした。

EPは本来はベーシック・イングリッシュを教えるための本であったから、書名も *The Pocket Book of Basic English* であった。ベーシックを習いたいというひとはかなりたくさんいる。多くのBasic loversは言語について論じるのが好きみたいで、直接的にからだで学ぶことはさけたがる傾向があるような気がする。しかしメタ言語を使わないでdirect methodでBASICを学びたいひとたちにも、わたしたちのやり方を知ってもらうには、どうしたらよろしいでしょうか。商売的にいうと、段階づけがきびしいために途中からクラスに入れないことが困ったことだ。しかし一時期は表紙に

### ENGLISH THROUGH PICTURES

[First named: The Pocket Book of Basic English]

A Self-Teaching Way Into English

つまり自習用の本として売られていた。わたしたちは学習者の自習能力をもっと信じてよいのではないか？ わたしたちはあまりにも親切にめんどうをみすぎていないだろうか？ 完全に学習させようとして、手取り足取りの「教え込み」に陥っていないだろうか？ 手抜きという悪いみたいだが、EPの扱い方にもっと「めりはり」があってもよいのではないだろうか？

English Through Picturesは実はEnglish Throughマンガなのだ。わたし自身がマンガ人間ではないので、気づくのが遅くなったが、京都精華大学にはマンガ学部があり、京都市といっしょにマンガ・ミュージアムをやっている。そこでの研究のひとつに、いわゆる普通の学問をマンガというメディアで伝えるというテーマがあり、リチャーズがEPでやったことは、まさに今日のマンガの隆盛を先取りしていた。風が吹いてきてボウシが飛ばされて、拾い上げてみれば、ボウシのしたに千ドル札が落ちていた。そんな大金を警察にもとどけないで、自分のものにしてしまい、何に使おうか相談するところがマンガの世界である。さらに初版では、お祝いにワインで乾杯するのだが、これについては、マンガの不理解者から文句をいわれて、スープを飲むだけにしたと聞いたことがある。

リチャーズには他に *Nations and Peace* (Simon and Schuster, 1947) というマンガとBASICで世界平和を論じた本がある。彼は1942~43年にカリフォルニアのディズニー・スタジオで

マンガの描き方をまなんだ。そのときの写真が *Life* 誌に出ている (18 October, 1943)。そこで壁一面に貼られているのは、わたしたちにはすでにおなじみの棒人間である。マンガは象形文字の復活でもある。

(2017年3月30日)

# 代名詞の指導順序の重要性～GDM と教科書を比べて～

松浦克己

## はじめに

文部科学省が打ち出した「英語で授業を」という方針は、誤解を含め賛否両論あるが、英語と日本語を一対一対応させた指導は英語の正しい理解につながらないことはほとんどの人が認めている。言語はその民族の歴史や文化とともに作り上げられてきたものであり、その民族の文化そのものであるのに、それを無視してその表面的な部分だけを置き換えることが無理であるのは当然である。特にその文化や世界観ともっとも密接に関連している前置詞や代名詞などの機能語や基本的な動詞について、日本語に単純に置き換えて理解させる指導は、その言葉の間違った理解につながるもののほうが多い。

## 1. 世界観を表す代名詞

英語学習の入門期における大切な学習事項のひとつに代名詞（人称代名詞と指示代名詞）があげられる。それは代名詞ぬきでは英語を理解できないことと、代名詞の使い方はその民族の世界観と大きく関係しているため、単純に日本語に置き換えるだけでは真の理解にならないからである。人称代名詞 I you he she it その複数形 we you they と指示代名詞 this that とその複数形 these those について、英語と日本語の違いを考えていく。

### (1) 日本語は人とモノ

日本語ではまず人間（person）とモノ（thing）のあいだに明確な境界線を引く。その結果、人を指すときは「こちらは、この人は」と言い、モノを指すときは「これは」と区別をする。人間は自分と相手、そしてその他の人間は男性と女性の区別をつける。言語によっては自分や相手も男性・女性の区別をつけるのもある。日本語では「私」と「僕」というよう使い分けもあるが、絶対的なものではない。つまり英語の人称代名詞で言うと、I / you / he / she のグループと it のグループにまず二分する。そしてこれら I / you / he / she のあいだでは文を作る上での区別はない。「私は先生です」という文の『私は』をあなたは・彼は・私の妹はとかえても、文の他の部分はそのままでよい。英文法の1人称、2人称、3人称という分けとは根本的に異なる。

### (2) 英語は自分と相手とそれ以外

このような日本語に対して英語は、まず話し手の I とその相手の you を確立させることから始まり、それ以外の世界中のものを he と she と it で分ける。この he / she / it は文を作る上ではまったく同じ扱いである。BE 動詞の文では同じ is を使い、一般動詞の現在形の文では runs / has のように I / you の時と異なる形をとる。he / she の複数形も it の複数形も同じ they を使う。人間を指すときも This is Ken. 物を指すときも This is my book. と同じ This / That を用いる。つまり I / you のグループと he / she / it のグループにまず分け、次に I am / You are のように I と you の間に境界線が引かれる。しかし一般動詞の現在形では同じ形を使

うことから、I / you のあいだの境界線と he / she / it のあいだの境界線は同じではない。このように世界観が大きく違っている2つの言語を、表面的な訳による1対1対応させるだけでは真の理解にはつながらない。

### (3) 「これ・あれ・それ」と this / that

指示代名詞 this / that も日本語の「これ・あれ・それ」とは考え方が違うので、指導する際に注意が必要である。英語は話者の近いものにたいして this を使い、離れているものに that を使うという単純な2分法の論理である。それに対して日本語は話者の近いものにたいして「これ」を使うのは同じであるが、離れているものにたいして「あれ」と「それ」を使い分ける。その基準は相手の this にたいして「それ」を、that にたいしては「あれ」というように使い分けている。英語が自分の遠近だけで使い分けるのに対して、日本語は自分の遠近と相手の遠近を組み合わせて「これ／あれ／それ」を使い分けている。安易に this は「これ」 that は「あれ」という指導では学習者を混乱させるだけであり、that の「それ」を it と誤解して覚える結果に陥りやすい。以上のことをどうやって指導すればいいかが次の問題となる。中学1年の4月の授業でこのような英語と日本語の違いを文法用語を使って説明すれば、正しい理解や使い方ができるようになると考える人はいないであろう。このような代名詞を GDM と教科書ではどうやって指導していくのかを見てみる。

## 2. GDM で教える代名詞

GDM は中学校だけでなくいろいろなところで使われているが、ひとつの例として筆者が公立中学校で GDM を活用して教えていた時の1年生4月の最初の6時間を次に示す。

時間	新出語	学習する文 丸数字は学習する順序
1	I You He She It They	① I You ② He She ③ It ④ They
2	is am are here there	① It is here / there. ② He / She is here / there. ③ I am here. You are here / there. ④ They are here / there.
3	We You (pl.)	① We are here. ② You are here / there.
4	Review と確認テスト	
5	This That my your his her	① This / That is Ken. He is here / there. ② This / That is my / your hand. ③ This is her / his book. It is here. That is his / her pen. It is there.
6	a	① That is a door. It is there.

1時間目では、I と You を基軸に世界の中でそれ以外の人を He と She に、モノを It で分けることに気づく。次に自分と相手以外は複数になると They となることを知り、日本語とは違って1と2以上を分ける必要(複数の概念)があることを学ぶ。2・3時間目では、まず It の存在場所を表す基本として遠近の観点から It is here / there. と言えるようになる。次に He /

She も同じ観点で He / She is here / there. と言えることを学ぶ。もちろん日本語訳や説明で理解するのではなく、Direct で目の前の実際の場面を見て発言していくなかで、自分で気づいていく。He / She / It にたいして I や You の時は am や are という is と違う単語、しかし意味は同じ単語を使っていくことを知る。次に複数になると We も You も They も同じ扱いをすればいいことを知り、実際のことを何度も言っていく過程で、それぞれの頭の中で文法の人称の表ではなく I You He She It We You They の関係をマッピングしていく。1 の (2) で述べた英語の世界観に基づいて人称代名詞を理解していく。ポイントは He She It が図 1 のようにグルーピングされることである。

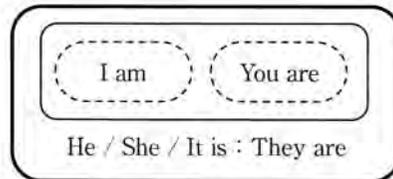


図 1

このグルーピングがしっかりと定着してから、ケンもマイクも He is there. となり区別できないので、手を指し示しながら That is Ken. He is there. That is Taro. He is there. と言えば、区別できることを学ぶ。here の場面では This is Yoko. She is here. と This を使うことを知り、here / there の基準と同じように This / That を使い分けて言えるようになる。モノを説明するときも This is my book. It is here. That is her book. It is there. とそれまでに理解したことをもとにその物を表す単語が分かれば何でも言えることを学んでいく。

このようにまず He / She / It のグループがしっかりとマッピングされてから、その He / She / It をより詳しく分けて言いたいときに This / That を使って説明するという順序で学んでいくと、This / That / It を「これ・あれ・それ」という日本語に対応させる誤った理解をすることはなくなる。この GDM の指導順序は非常に巧妙に設計されており、日本語訳や説明を用いることなく英語の世界観に基づく代名詞の使い方が理解でき、BE 動詞の使い分けも定着するたいへん有効な教授法である。

### 3. 教科書の指導順序

現在中学校の検定教科書は東京書籍：NEW HORIZON (NH)、三省堂：NEW CROWN (NC)、開隆堂：SUNSHINE (SU)、光村図書：COLUMBUS (CO)、教育出版：ONE WORLD (OW)、学校図書：TOTAL ENGLISH (TE) の 6 種類が出ている。それぞれの教科書における指導順序を示す。

- NEW HORIZON

I am / You are / Are you? / This is That is / Is this Is that? / it is / She is He is /  
一般動詞 1・2 人称

- NEW CROWN

I am / You are / Are you? / This is That is / Is this Is that? / it is / She is He is /  
一般動詞 1・2 人称

• *SUNSHINE*

I am / You are / Are you? / 一般動詞 1・2 人称 / This is That is / Is this Is that? / it is / She is He is

• *COLUMBUS*

I am / You are / Are you? / This is That is / She is He is / Is she? / What's this? It is / 一般動詞 1・2 人称

• *ONE WORLD*

I am / You are / Are you? / This is That is / Is this Is that? / it is / What's this? It is / 一般動詞 1・2 人称 / She is He is

• *TOTAL ENGLISH*

一般動詞 1・2 人称 / 一般動詞 1・2 人称疑問文 / I am / Are you? / This is That is / She is He is / Is this Is that? it is

(1) 2つのパターンの特徴

どの教科書も、人称代名詞 1・2 人称 (I・You) ⇒ 指示代名詞 (This・That) ⇒ 人称代名詞 3 人称 (He・She・It) という順序で指導する。しかし NH, NC, SU, OW の 4 教科書と CO, TE の 2 種類とは、3 人称 (He・She・It) の順序が異なっている。

• NH, NC, SU, OW …… This・That ⇒ It ⇒ He・She

• CO, TE …………… This・That ⇒ He・She ⇒ It

この違いは見落とされがちだが非常に大きく重要である。『This・That ⇒ It ⇒ He・She』で教える教科書として NH で内容を詳しく見ていく。まず This is / That is my pen. を学習し、次のパートでは Is this / that…? の疑問文が出され、その答として Yes, it is. No, it is not. It is … を学習する。だいたい 3, 4 時間使ってこの 2 つのパートを学習する。モノに関するやりとりばかりで、ちょうど日本語の人とモノを分ける世界観に合致する。その後 This is Alex. He is my friend. などの文で、This / That で人を示し、He / She でその人のより詳しい情報を伝えていくことを学習する。このような順で指導されると学習者は This / That / It のグループ、すなわちモノのグループと He / She の人のグループに分けて整理していくことになる。さらに「これ・あれ・それ」といった日本語訳をもとに理解させていく授業形態であれば、This / That / It のグループがより確固としたままとまりになってしまうのは容易に推測される。

一方『This・That ⇒ He・She ⇒ It』の例として CO を見てみる。CO では This / That の文として This is Aya. That's Taku. というようにモノを指し示す文からではなく、人を指し示す文から教える。そして That's Ms. Ogawa. She's our math teacher. というように He / She を使ってより詳しい情報を付け加えていく。この This / That ⇒ He / She のような学習を 3, 4 時間したあと、What's this? It's your school badge. といった文で、モノについての話題についても学習する。この順で学習すれば、This / That / It をひとつのグループとして考えることは非常に少なくなる。そして人でもモノでも This / That でまず話題を提示し、それからその中身に応じて He / She / It を使ってより詳しい情報を伝えていくという概念が作られやすいと思われる。

もう一つの問題として『This・That ⇒ It ⇒ He・She』の教科書では Is this / that? の疑問

文とその答の文が学習課題の中心となり、This / That を 2 回目には It に換えるという誤った理解をしやすいことがあげられる。NH の基本文の横に書かれている説明に『疑問文では、is が this や that の前が出る。答の文では it を使う』とあり、This / That が 2 回目になると it を使うと読み取られがちである。そしてモノの This / That / It のグループと人の He / She グループという分け方が入門期にしっかりと作られてしまうのではないだろうか。

## (2) 正しい理解のために

図 1 は英語の人称代名詞の世界観を表している。これに対して図 2 は日本語におけるものである。『This・That ⇒ It ⇒ He・She』の順で教える教科書で、図 2 のような世界観の日本語を使って英語を理解していくと、1 (1) で述べたように図 3 のような理解となってしまう。

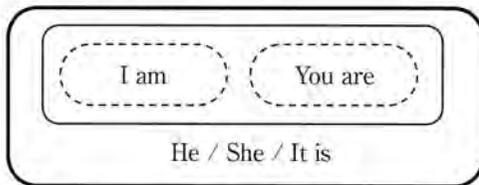


図 1

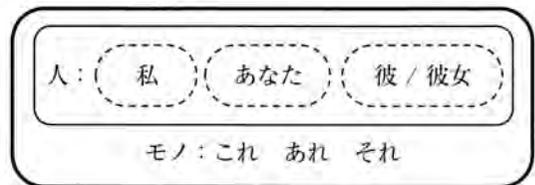


図 2

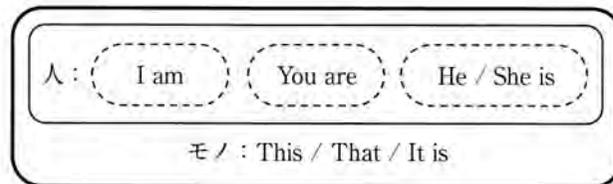


図 3

学習者がこのような間違った理解に陥らないようにしなければならない。もちろん指示代名詞がどうのこうの、人称代名詞は…といった文法用語を使った説明がその解決策にはならないことは誰もが賛成するところである。もっとも自然に英語の感覚を理解させる方法は GDM で指導することである。小牧市内では教科書に入る前に 2 章で述べた GDM の学習内容を指導する中学校もいくつかある。

NH, NC, SU, OW などの教科書では、ひとつの工夫として This / That の疑問文に入る前に、This / That はモノだけでなく人にも同じように使うことを理解させることが有効である。例えば、友達どうして That is Ken. He is from ...Elementary School. といった活動をさせる。そしてモノを聞く疑問文ばかりでなく、Is that Aya? といった人を聞く疑問文も一緒に扱っていく。このように教科書の順序そのままではなく、少し変えるだけで大きな効果が期待できる。

## 4. 小学校英語の教科化にむけて

「教科書を教える」のではなく「教科書で教える」とは言い古された言葉であるが、英語学習の入門期においては特にこのことに留意して指導しなければならない。使用している教科書だけでなく、他の教授法を活用することはとても大切であり、GDM はたいへん有効なものである。現行学習指導要領の英語解説書 56 ページには「文法については、コミュニケーション

を支えるものであることを踏まえ、コミュニケーションを実際に行う言語活動と効果的に関連付けて指導することが重要であることを今回の改訂で新たに示したものである。」（下線部筆者）下線部はGDMの理論のSENSITSの説明と言っていい内容であり、GDMの教え方を取り入れることは、学習指導要領が求めている英語の授業の方向と一致すると言える。

2020年度から実施される新学習指導要領案が2月に提示され、教科となる小学校の英語科の内容が少しずつ見えてきている。現時点で考えていかなければいけないことの一つとして、小学校で扱う語数を600から700語と示したことである。現在の中学校の教科書の単語数が1,200語、そして新学習指導要領案ではこの600から700語に付け加えて中学校で1,600から1,800語と言っている。また現在示されている「小学校外国語活動年間指導計画例（素案）」で生徒が使うと想定されている単語の多くは食べ物、図形、動物、スポーツ、職業、色といった名詞である。これらの語は英語学習を支える幹とはなり得ず、入門期で育てたいしっかりとした土台作りにもプラスとならない。逆にこれらの語をたくさん覚えさせれば覚えさせるほど、日本語と英語が1対1対応するような誤った認識を植え付け、その後の英語学習に大きなマイナスとなる可能性が非常に高い。このような誤った英語学習のスタイルを身につけた中学1年生にGDMで教えることは大変有効である。まったく正反対の学習スタイルを示すことは効果的である。そしてGDMで教えるだけでなく、早い段階でルートセンスを学ぶことの大切さを実感させるために次のようなことも考えられる。

GDMで“off”や“take”を学習し十分に使えるようになった後、日常生活のなかのカタカナ語として「オフ」を使った言葉を発表させる。30% オフ、シーズンオフ、オフサイド、オフホワイト、スイッチのオン・オフ、スポーツのプレイオフ、オフロードバイクなどなど。これらの語の意味と学習したoffのルートセンス「My hand is on the table. の状態から手をすつとテーブルから離して My hand is off the table. 壁に貼ってある絵 The picture is on the wall. が風で飛ばされて It is off the wall. Now it is on the floor. 」とがどうつながっているのかを考え、グループで話し合わせ、発表させる。定価から30% 離れている（日本語では7掛け、見方が違う）、スイッチは理科で習った配線図を描けば一目瞭然、白から少しだけ離れた色で白ではない、レギュラーシーズンが終わり少し経って（離れて）行われるプレイオフ…どれもルートセンスから考えていけば同じ意味であることは、1対1対応が英語の学習と思い込んでいる生徒にとって新しい発見であり、驚きでもあると想像される。それが分かれば、ひとつずつ日本語で丸暗記する学習方法のマイナス面を納得する生徒もより多くなるのではないか。

中学校で学習する動詞でもっとも日本語訳が多いのがtakeである。教科書によっては10以上（日本語訳では）の意味になり、「時間がかかる」「連れていく」「取る」「買う」「写真を撮る」「服を脱ぐ」「乗り物に乗る」など、それぞれ出てくるたびに「いろいろな意味がある単語だからがんばって覚えなさい」という指導がよくおこなわれている。takeのルートセンスは、on the tableの状態の箱を、on the boardの状態の絵を、on the wallの状態のカレンダーを、offの状態にする動作である。この動作をもとに考えれば、レジで代金を払う前の動作はまさしくI'll take it. その場面を日本語にすれば「これを買おう」となるが、takeのルートセンスを理解する前に「take=買う」と教えられれば、家に帰ってきてお母さんにI took this pencil at… と言うのが不自然とは考えられないのは当然である。

黒板に貼ってある写真を取る動作がtakeであることから、黒板を目の前に広がっている風

景として考えれば、その一部を取り込むカメラの機能を take で表すのも同じ動作であることは容易に理解できる。カメラという今までになかった機械が発明され、当然のことながらその機能は新しいことなのでそれを表す言葉はその時点では存在していない。そこでその機能を表現する方法はふたつある。ひとつは新しい言葉を作って対応させる。もうひとつは、身のまわりの言葉で本質的に同じである意味の言葉をそれにあてる。どちらが有効で多く使われているかは明らかで、写真の take もこの後者の例である。

「時間がかかる」take も黒板から写真を取る動作がきちんと理解されていれば、黒板にタイムラインとして矢印を左から右に描いて、そこに昨日の出来事の時刻を入れながら話していく。8時半に家を出て、9時半に名古屋駅に着いたことを確認して、その矢印上で1時間分を取り出す動作をしながら、It took one hour from my house to Nagoya Station by car yesterday. と言えば、生徒は黒板から写真などを取る took と時間の took を容易にそして自然につなげて理解することができる。

せっかく GDM で “take” や “put” の 3 時制を教えても、教科書を指導していくときに “take” を上記のような観点で導入せず、「今日の意味は今までと違ってものを買うときに使うんだよ」とか「写真を撮るときにも使うよ」といった説明で教えていては、GDM を取り入れた良さが半減してしまう。

GDM を何らかの形で学校現場に取り入れている教師がそれぞれの実践を出し合い、共有していくことが求められる。ひとつひとつの小さな取り組みを積み重ねていくことしか、今後予想される英語教育の困難な状況への対応策はないと思われる。まさに「戦略は細部に宿る」という言葉が当てはまる。月例会や各セミナーでの実践報告、Year Book での発表、などの活動が大切になってくる。



2016年夏セミナー（東京）



2017年春セミナー（京都）

## 主体的な学び・対話的な学び・深い学びと GDM

磯野 秀仁

日本の子どもたちの学びは世界一受動的であるという調査結果があります。子どもたちはそのほうが楽なので教師から教えられることや、黒板に書かれたことを写すことを好みます。国立青少年教育振興機構が日・米・中・韓4か国の高校生意識調査結果を発表(2017.3.13)しました。日本の高校生は米国、中国、韓国の高校生より著しく低い数値を示す調査結果でした。

①問題意識を持ち、聞いたり調べたりする。

日本(12.3%) 米国(34.5%) 中国(52.7%) 韓国(10.4%)

②教わったことをほかの方法でもやってみる。

日本(7.5%) 米国(45.8%) 中国(25.9%) 韓国(10.4%)

③授業中、積極的に発言する。

日本(3.7%) 米国(14.9%) 中国(17.2%) 韓国(15.6%)

「勉強が受け身になる背景には一方的な講義形式や一斉授業が多く、生徒が能動的に学ぶ授業が少ないことが大きく影響し、学ぶことへの消極的な姿勢は控えめな人生目標にも反映している(朝日新聞2017.3.14)」と調査関係者の一人明石要一氏は分析しています。

日本の子どもたちの学ぶことへの消極的な姿勢に文部科学省は危機感を持っています。文部科学省は教師も含め子どもが主体性を持ち、協働的で探究的に学ぶアクティブラーニングという言葉を持ち出し日本の教育を「何を学んだか」以上に「何をどのように学んだのか」を大切にしようとする方向に変えようとしています。平成32(2020)年から教育を新しくし、活性化するための仕組みや考えが盛り込まれた新学習指導要領が全面実施されます。平成28年8月、その新学習指導要領に向けて教育課程企画特別部会での論点整理が以下のようにとりまとめられました。学習する子どもの視点から育成すべき資質・能力が三つの柱で整理されています。

①何を知っているか、何ができるか〔個別の知識・技能(身体的技能や芸術表現のための技能等も含め)着実に獲得しながら基礎的、基本的事項を既存の知識・技能と関連付けたり組み合わせたりして知識・技能の定着を図り社会の様々な場面で活用できる知識・技能として体系化し、身に付けていく〕

②知っていること・できることをどう使うか〔そのために必要な思考力・判断力・表現力とは情報を他者と共有しながら、対話や議論を通じて互いの多様な考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考えに共感したり多様な考えを統合したりして、協力しながら問題解決していくこと(協働的問題解決)のためのもの〕

③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか〔学びに向かう力、思いやり等関係性(仲間づくり)〕

特に、今回の特徴は②の学び方と特に③が追加されたことです。変だぞ? どうなったのだろうか? 昔の人たちから何を学べるだろうか? 身の回りにどう活用されているか? 等を共同してより深く学ぶ。そして性差を乗り越え、自由に語り、共同して学ぶことが楽しい。孤立しそうになった時に仲間が引き受けてくれているか等を大切に教師が教えるから子どもが学ぶことへと大きくモメントと質的転換が図られています。コベルニクスの転回です。ポイント

は次の3つです。

- ①「主体的な学び」学習者一人ひとりが感覚を働かせ、身体的な活動をとまなう学びを中心とし、「体験」を通した積極的に参加する学びになっている
- ②「対話的な学び」子ども同士、先生との双方向的な「言語（顔の表情や記号も含め）」交流を通して、自らの考えを確認したり、広げたりする学びになっている
- ③「深い学び」自分の持っている知識や経験を意識し、それらを使って自分なりに「納得」する解決を得ようとする学びになっている

GDMと3つのポイントとの関係について考えてみることにします。

子どもが学ぶことへの転換で大切なことは、いかに自己肯定感が確保され、それが self-empowerment につながっているかが大切となります。自己肯定感をわかりやすいコトバで言うと「自分は大切な存在、価値ある存在だ」と感じることを言い直せます。このことで思い出されるのがドリアン助川作、河瀬直美監督によって映画化もされた『あん』です。ハンセン病患者は家族から世の中から見捨てられ、施設の中に閉じ込められ、厳しい人生を送らざるを得ませんでした。元ハンセン病患者、徳江（樹木希林）さんは「私が居なければ、この満月はなかった。木々もなかった風もなかった。私という視点が失われてしまえば、私が見ているあらゆるものは消えてしまうでしょう。」と言いました。徳江が、年を経て知った人生の意味です。産むことを許されず生きていれば同じ年の、手抜き“あん”を作る千太郎を見て、どうしても関わりたくなりました。小豆の表情を見て小豆が見てきた雨の日や晴れの日を想像し、どんな風に吹かれて小豆がここまでやってきたのか旅の話を聞きながら“あん”を作ります。ここに、徳江の“やさしさ”と“強さ”、“あたたかさ”、人生に対する“真面目さ”と“ひたむきさ”を感じ、心が揺り動かされます。どんな人も、どんな人生にもこの世界に生まれたことに意味がある。大切な存在、価値ある存在なんだ。「私たちはこの世を見るために、聞くために、生まれてきた。だとすれば、何かになれなくても、私たちには生きる意味があるのよ。」と。ある時、ある場所から見つめているもの、聴いているものがあるということが世界を支え、世界がかくあると…だれも見なかった、だれも聴かなかつたら、世界がかくあるということも、世界が語るということもありません。千太郎宛の徳江の手紙の中に書かれています。これこそが根本の所で私たち一人ひとりの自己肯定感を支えています。

GDMではSEN-SITとGradingを有効に使いDirect Methodのメリットを最大限にし、デメリットを最小限にする学びによって学ぶ人（教える人も含め）はディープなところで自己肯定感を感じることができるようか。

片桐ユズルさんは、『基礎英語の教え方』の「場面をあらわすセンテンスと場面をひらくセンテンス」でリチャーズのSEN-SITについて書いています。リチャーズはSEN-SITの関係を2つのタイプで考えました。SENs/SIT（消極的用法）とSITs/SEN（積極的用法）です。はじめにセンテンスは、それが発せられて場面によって運ばれる。あるいはその場面に乗っている。場面はセンテンスの「乗り物」。これは言語の「消極的」用法。「積極的」用法においてはセンテンスが場面を運ぶことができる。授業をデザインするときにはこの順番を組み合わせて、自分の意志で状況を変える。自分のsentenceが新しいsituationを作っていく「積極的」用法が「消極的」用法に続くようにできるだけ絶え間なく、「識別がはっきりするように」配列する必要があると述べています。学びには2種類があります。1つは他者の考えややり方をまね

る。もう一つは他者の考えややり方を足場 (scaffolding) に考えややり方をつくりだす学びです。SEN-SIT によって授業をデザインします。まず SENS/SIT (消極的用法) を使って学習者一人ひとりが感覚を働かせ、身体的な活動をとまなう学びが設定し「主体的で双方向的対話的学び」にします。続く活動 (activity) は仕組まれた活動であっても SITs/SEN (積極的用法) を促され、チャレンジする「体験」は積極的に参加する雰囲気、他者の考えややり方を足場 (scaffolding) にする学びを醸成します。そして、SEN-SIT による活動 (activity) は「対話的な学び」、子ども同士、先生との双方向的な「言語 (顔の表情や記号も含め)」交流を通して、自らの考えを確認したり、広げたりする学びの場となっています。「深い学び」は順序性 (grading: 先に習うこと後で習うことの下ごしらえになり、後で習うことが先に習ったことを補強する配列) と日本語を使わない方法 (direct method) によって学んでいる言語の意味の広がり意識し、表現の核心部分を使って自分なりに「納得」し解決をしようとするコトバの学びになっています。「深い学び」は一つ一つの活動 (activity) 中でと、授業デザイン全体を通して深まりを大切にしていかなければなりません。子どもたちの状況や状態を通して注意深く活動 (activity) を選択し、SENS/SIT (消極的用法) と SITs/SEN (積極的用法) を組み合わせ、配列するフローをつくるのが大切となります。SENS/SIT (消極的用法) によってコトバが立ち上がる。SITs/SEN (積極的用法) によって状況やコトやモノをコトバが立ち上がらせる経験や教える側が立ち会うことがディープなところで学習者と学習者同士や教える側にも自己肯定感、そして empowerment を醸成していきます。自己肯定感、仲間への肯定感、学ぶクラスへの肯定感自分エンパワメント: Self Empowerment, 仲間エンパワメント: Peer Empowerment, クラスエンパワメント: Community Empowerment と相乗的に組み合わせられ実現されていくと言われています。

1993年名古屋での中級セミナーでの片桐ユズルさん自身と石井恵子さんの2つの例(「場面をあらわすセンテンスと場面をひらくセンテンス」)で考えてみたいと思います。

Ex.1 “An orange is on the table. Cookies are on the plate. Cups are on the table. Hot water is in the pot. Pictures are on the board. A frame is on the table.” という situations をつくり、あとの動作は生徒自身が決めて “I will go to the board and I will take that picture of a man and a woman off the board. And I will put the picture in the frame.” “I will go to the table, and I will take a cup off the table. And I will put hot water in the cup.”

Ex.2 my, your, his, her の復習するようにして “That is your book.” “Yes, it is my book.” その本をクラスに見せて “That is his book.” 素知らぬ顔で、その本をテーブルに置く。こんどはだれかの bag をさすと “This is my bag.” “This is her bag.” と言いながらテーブルに置いてしまう。Take を導入したあと生徒たちは自分の book や bag をとりもどすために “I will take my book off the table.” “I will take my bag off the table.” と言う。

SENS/SIT (消極的用法) ではあるが先生や仲間という他者との関係の中に双方向的対話やうなずき等を入れ、共感性、当事者性、参加意識を支えに Ex.1 では “An orange is on the table. Cookies are on the plate....” と Ex.2 では “That is your book.” と。Ex.2 では “Yes, it is my book.” と言ってからその本をクラスに見せて “That is his book.” 素知らぬ顔で、その本

をテーブルに置く。こんどはだれかの bag をさすと “This is my bag.” “This is her bag.” と言いながらテーブルに置きます。Ex.1, Ex.2 両方とも SENs/SIT (消極的用法) で場を整えています。そして、積極的用法として SITs/SEN を展開します。Ex.1 “I will go to the board and I will take that picture of a man and a woman off the board. And I will put the picture in the frame.” “I will go to the table, and I will take a cup off the table. And I will put hot water in the cup.” Ex.2 では生徒たちは自分の book や bag をとりもどすために、場面転換を図れる手段として “I will take my book off the table.” を使って先生にチャレンジします。友だちの取りもどすのを見て、戦略に共感したもう一人の生徒は “I will take my bag off the table.” と背伸びとジャンプをします。“I will take my book off the table.” を使った2人の生徒は見通しと発展性、解決した満足感から自分と友だちへの肯定感を持つことになります。そして、その場にも自己肯定感が醸成され、さらに “I will take ....” と背伸びとジャンプをする仲間がでてきます。その自己肯定感は学習者の学びに向かう self-empowerment ともなります。場面はセンテンスの「乗り物」。たとえ SENs/SIT (消極的用法) であっても、センテンスを場面に乗せるのは「私」です。とりわけセンテンスが場面を運ぶ SITs/SEN (積極的用法) の感覚を体験したときに学習者はより「私という視点が失われてしまえば、私が見ているあらゆるものは消えてしまう」経験をするのかもしれませんが。

SEN-SIT の SIT はライブばかりではありません。stick-figure を使った絵もそうです。English through pictures では1ページは4つの絵で構成されています。人間の目は不思議と前の絵と後の絵とのかけている部分に目がいきます。連続性の面で欠けていることを補おうとします。人は絵を動かそうとするのです。むしろ絵が動き始めると言って良いかもしれません。そして、起承転結というスキーマをもって物語ろうとします。起承転結それぞれの要素を四コマならばきちっと入れられます。五コマならば、間延びしたようなものになってしまいます。三コマなら守、破、離で徐々に始まり、急展開し、速やかに終わり読み手を飽きさせなくできます。新井等さんが『500 Pictures for GDM Teachers to Copy』を出版しました。出来合いのワークブックは教える側にも学ぶ側にも SENs/SIT (消極的用法) 感を残します。しかし、出来合いの絵でも自己関与できた教材づくりや新たなストーリーづくりは SITs/SEN (積極的用法) 感は教える側にも学習者にも主体性と著者性が帯びてきます。新井等さんの『500 Pictures for GDM Teachers to Copy』は私たちの教材づくりへの抵抗感を減らし、背中を押してくれるものです。その意味で GDM にとても重要で大切なものになると思います。

社会の様々な場面で活用できる知識を求めようとする本物 (authentic) の教材が必要となります。しかし、本物 (authentic) の教材は権威 (authority) を持ち、権威をもとに教える側は学び手の主体性・著者性 (authorship) を阻みがちです。3つの御旗を同時に立てることには難しさが伴います。しかし、そのような矛盾を乗り越え、学びの場で教師は生徒を学びの主人公として、探究心に火を付け、夢中になれるようオーセンティックな (真正の) 教材や活動 (activity) を持ち込み、本質的な問いを設定し、生徒を教材と向き合うようにしなければなりません。石井恵子さんの Ex.2 “take” の授業のように、授業をデザインするとき “take” の核心的な部分を押さえた SENs/SIT (消極的用法) から SITs/SEN (積極的用法) に移るときに課題の展開の仕方を工夫し、活動 (activity) のあり方を変えてみる。応えてくれるのは子どもたち。子どもたちが自分の book や bag をとりもどすために “I will take my book

off the table.” “I will take my bag off the table.” と必死になって、夢中になって応じてくれる中に子どもたちのさらなる可能性を教師は感じます。教師自身が子どもを見ていたときに見えていなかったことが変わって見えてきます。そのことに手ごたえを感じてきます。そのことを周り（片桐ユズルさん）が自分のことのように共感してくれる。それによって教師自身や周りの教師（Ex.1のように片桐ユズルさん）の学習への探究が続いていきます。そして、GDM実践する人たち全体へ影響が及び変わっていく。このサイクルができるかがGDM自身の持つ先進性がさらに発展させていくことにつながっていきます。これまでの授業研究ではこのサイクルが十分に語られてきませんでした。そして子どもの存在が消され、教師の言動と努力だけが語られてきました。子どもたちが「消極的」用法から主体的に自分の sentence が新しい situation を作っていく、「積極的」用法に取り組む様子があることでGDMに関わる教師の学びは未来志向となっていく。教師の日々の学びと、繰り返しの中においても新たな小さな挑戦に答えてくれるのは子どもたちです。そこに教師の学習者を尊敬（respect）する気持ちと謙虚さが生まれ、応じてくれる子どもたちを思い、教師は教科の高い専門性を求めて学び続けていくのだと思います。

「学びとは世界との出会い方を増やすこと、分節（部分に分ける＝articulation）活動である」という学びの定義があります。アーティキュレーション（articulation）とは、ものごとがくつきりとした輪郭を持って意識に立ち上ること、モノの世界のうえにココロが作用して、コトという網が被せられ、モノがコトへと分かたれるところに見えてくる言語的世界のことです。構造主義言語学の祖として知られる、フェルディナン・ド・ソシュールの考えです。一つのことでも自然科学の目で、社会科学の目で、文学の目からそれぞれに景色は異なったものに世界の見え方は変わってきます。学べば学ぶほど世界の見え方は違ってきます。異なった世界の見方は、私たちの人生を豊かで幸せなものにし、彩ってくれます。学校で習う科目は内容教科と技能教科の大きく2つに分けられます。英語は音楽・美術・技術家庭科・体育の技能教科に入ります。技能教科は技能の重要性が高いがゆえに練習を必要とする割合が高く、学習は個人的な側面が強いと考えられがちです。また、生まれつきのセンスや才能が学習の成果に大きく影響を与えると考えられがちです。そして、反復練習によってその生得的な差が克服されると思われがちです。苦手な場合、なぜかコンプレックスにつながり自己肯定感を下げ、劣等感を残します。「英語なんて、英語が得意な子がやればいいんでしょ。日本で英語なんてできなくても生きていけるでしょ！」等々。スキルアップ（上手にできること）は技能教科の最終目的ではありません。英語が上手でないからといって英語という世界と出会えないことはありません。学校で学ぶことはそれぞれの学びの世界に出会う経験を積み重ねることによって学校を卒業しても楽しみ、学び続ける基礎を獲得することです。できることは結果であって、最終的な目標ではなく出会い方の種類を増やし、出会い方のきめの細やかさを味わうこと、出会い方を繊細にするプロセスとも考えられます。世界との出会いは発見と対話の連続であり言葉を媒介した活動です。生徒たちの発見は常に十分というわけではありません。先生のほうからヒントやチョットしたアドバイスが必要となります。しかし、そこで重要なことは生徒たちが正しい答えを教わる前に「こうかな」「ああかな」「いや、こうだよ」と自分たちで発見を交流しながら、こうしたらいい、ああしよう等とめいめい話し合いながら何度も探求することです。自分たちで取り組み、自分の身体で知っていく。体験的に発見し、グループやペアの仲間・相手と言葉で交

流することによって世界と出会う道が開かれることです。先生の教えてくれることも教科書の言葉も生徒たちにスムーズに入ってきます。全ての学びにおいて教えたことこそ、発見させる。そのために活動 (activity) を入れることが必要です。「生徒たちは自分の book や bag をとりもどすために “I will take my book off the table.” “I will take my bag off the table.” という」活動 (activity) のように。子どもたち自身で発見し、身体で納得したことだからもっとと意欲は高まります。そして、そこに挑戦する仲間がいて、さらなる高みを目指していきます。学び合いには「あとの動作は生徒自身が決めて “I will go to the board and I will take that picture of a man and a woman off the board. And I will put the picture in the frame.” “I will go to the table, and I will take a cup off the table. And I will put hot water in the cup.” や生徒たちは自分の book や bag をとりもどすために “I will take my book off the table.” “I will take my bag off the table.” という」活動 (activity) のようにお互いのスキルを見合う技術的な意義 (「わかちあい」 sharing) だけでなく支え合うというケアリング (caring) ・情緒的意義があります。学び合う関係によってより豊かで、幸せを子どもたちにもたすことができます。

2016 年度ノーベル文学賞を受賞したボブ・ディランは、受賞スピーチの中でこれまで演奏家として5万人を前に演奏したこともあれば、50人のために演奏したこともある。50人に演奏する方がより難しい。5万人は「一つの人格」に見えるが、50人はそうではない。一人ひとりが、それぞれ別の違ったアイデンティティ、言葉を持ちます。彼らは物事をより明確に見抜くことができるのです。あなたの誠実さ、それが才能の深さとどう結びつくのか、試されると述べました。GDM を教える私たちはクラスを「一つの人格」と捉え、知識や技術を教える側から学ぶ側へいかに効率よく移し替え、暗記させ、教え込むアプローチをとりません。学習者一人ひとりの学びが「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」となるようフロー全体で SENs/SIT (消極的用法) から SITs/SEN (積極的用法) へと続くようにデザインします。授業研究会では学び手の様子を観察し、学び手の事実から「どこで学びが成立したか」、「どこで学びが停滞したか」、「授業から何を学んだか」を省察 (reflection) することが大切です。そして、研究者の知見にも学び、先を焦らず、翻弄されることなく、惑わされることなく、真摯に、どんな条件下であっても卓越性 (excellence) を求める GDM 実践者であって欲しいと思いますし、ありたいと思います。そのときに気をつけなければならないことがあります。授業研究は車の両輪にたとえられます。右の車輪は子ども同士や授業者と子どもとのかかわりやケアの様子。左の車輪は教科の専門性や発問、指導技術などです。左の車輪ばかりで回る授業研究は授業者批判となりがちです。右の車輪ばかりで回る授業研究は堂々巡りで飽きます。前に進んでいくには両輪をバランスよい話題で回す必要があります。ハンナ・アーレントが『人間の条件』で区別したように英語を教えることや学ぶことは、work (仕事) でも labor (労働) でもなく、activity (活動) でありたいと思います。

最後に、ここ10年ほど生徒に直接英語を教えることが少なくなりました。38年前、教育学部出身なので附属中学で教育実習をしました。英語の授業スタイルはオーラルイントロダクションとパンプラクティスの組み合わせで、子どもたちも素直についてきてくれました。英語教師としてのスタートを切って数か月で英語の授業が行き詰まりました。ある英語教育雑誌の中に GDM に関する記事と本が気になり、吉沢美穂さん宛の手紙を書いて出版社に送りました。しばらくして吉沢美穂さん自身から返事が返ってきました。 *Teachers' Handbook for*

*English Through Pictures Books I, II*が手元に届き、御殿場のサマーセミナーへの誘いがありました。これがGDMとの幸福な出会いの始まりでした。以後38年間、リチャーズの生き方とGDMに魅せられ、片桐ユズルさん、升川潔さん、山田初裕さん、箕田兵衛さん、原田弘さん、新井等さん他多くの方々からたくさんのことを学び、教えていただきました。十分に消化できないままであることが残念ですが感謝でいっぱいです。ありがとうございました。

(山梨県 増穂中学校)



2016年夏セミナー

# 大人のクラスの GDM と Basic English

多 羅 深 雪

## 1. 大学生涯学習課 Open College の大人のクラスとそのクラスの受講生たち

2003年の4月からフェリス女学院大学生涯学習課（Open College）で、大人のGDMクラスを2クラス始めてから、今年で15年目になります。2016年では、『やり直す英会話1』として月曜クラス10名、『やり直す英会話2』として金曜クラス7名で、各クラス午後の90分授業、春学期、秋学期各12回で、各期に毎回申込みをします。受講生は、月曜の初級クラスは、主に女性30代から60代まで。月曜クラスは、テキスト *English Through Pictures Book 2* (EPと略す) pp.55~64 をしました。10名中5年継続でEP1の初めから学んでいる受講生は1名。あと2人は2年目でEP1, pp.72から始めました。ほかの7名は、EP2, pp.55から始めました。主に30代から60代の主婦、子育て中でパート勤務または会社または教職退職後の女性が多いクラスです。男性は1人か2人、退職者かフリーな勤務の方です。金曜のクラスは、退職者の男性2名、60代、70代の女性が4名、30代の女性が1名でした。そのうち2名は10年から12年。EP1, pp.1からEP3の途中まで学んできました。あとの2名は5年から6年このクラスで継続です。30代の主婦（元英語教師。今年4月から教師復帰）は2016年のみ。このクラスはEPBook1からBook2まで終了ということで、かなり自由に英語で話をし、Basic Englishの読み物として *An Outline of The United States* (J. B. Wight) を使用しています。12回のうち各受講生はテーマも自由に1回はPresentation (Speech) をしていただき、皆でQ&Aあるいはそれに関することで話題を広げて話をしています。今までにEP以外で読んだBasic Englishの本は、*Stepping into the Past, People In Livingston, The Basic Reading Books* (L. W. Lockhart, first published in 1938) です。かなり古い出版年の物ですが、中高年の受講生の方々には、読みやすい、内容が現実の話のようで面白いと好評でした。現在よんでいるアメリカ史の本も日本語の本にない内容で、しかもBasic Englishでよめるので受講生だけでなく、私も興味深く読んでいます。

夏休み、冬休みは各3回『やり直す英会話1&2』のGDMの授業とListening発音矯正をいれて、クラスをしています。この時だけの参加者もいます。GDMを体験してもらい、春秋のクラスへ参加してもらいたいという意味もあります。

## 2. 『やり直す英会話1&2』大人のクラスの受講理由

2003年4月から2016年3月までの14年間に月曜初級クラスの受講生は、各学期7名から(7名以上で開講)多い時は21名。金曜クラスは7名から12名(最近は主に7名で続いています)。

二つのクラスとも、『やり直す英会話』というクラスの名前から参加の動機は、①学生時代以降英語を学ぶのは初めての方でこれから英語を基礎から復習し習得したい。②家族が外国人と結婚し海外在住、あるいはご本人が海外駐在在住の経験があり英語をもっとよく話したり、メールを書いたりしたい。③海外から日本への観光客やゲストに英語で応対できるようになりたい。東京オリンピックも近いので。④退職し、興味をそそる知的刺激を求めて。頭の老化防

止のためにも。⑤海外旅行などで英語が通じるようにしたい。⑥いずれ子どもと海外留学をしたい、などなど。

### 3. *English Through Pictures Book 1, Book 2* や *Basic English readings* を続ける意義

大人の2クラスは、春、夏、秋、冬の各期に受講生を募集するので、長い方は10年以上継続してくださり、短い方はその期のみという方もいます。月曜GDMクラスは、EPBook 1, Book 2とも途中から参加という受講生も多いので、それまでのreviewをなるべく多く入れながら、新しいページに進んでいきます。EPBook 1のはじめから、Book 2を終了するには、約3年から4年かかりました。EP本文だけでなく、EPの後ろのwork, A Workbook for Adults や新井等さんの『GDMワークブック2005』や自作のワークなども使いますので、EPの進み具合は、まとまりごとに4ページから数ページになり、workで終わることもあり、比較的ゆっくり進みます。そのため、12回のレッスンでは、EPは平均約20ページか30ページくらいです。そのため、継続して3年4年と受講してくださる方は少なくなります。

金曜のクラスの受講生で現在10年から12年継続の2人のみEP1とEP2を学んでいます。Book 3はpp.147まで学びましたが、終わりまでいけませんでした。内容が科学的哲学的になり、今まで学んだことがグレードアップしてくるので、受講生も私も準備や復習が大変になったためです。その後は、上記に述べた内容の理解しやすいBasic Englishの読み物をまずLiveで私が説明をし、理解したあと、皆で本文を読み、発展として自分たちのことを話すようにしました。ほかにAsahi WeeklyなどFull Englishの英文を読み、記事のなかからBasic Englishを見つけ皆で比較したりしています。

両クラスともGDMのクラスであることとGDMを経験してきているので、1回90分の授業はもちろん英語のみという習慣がついています。その点では、学部生のクラスより英語で表現するということができていると思います。英語で考えて発言しているかたがたは、長く受講している方に多く、まだ短期間の方々のなかには、まず日本語で考えてそれを英訳して発言している方もいます。EPを繰り返し学ぶことでDirectに英語で考えることができることが理想的です。

長い方々でまだBasic Englishが身に付いてなく、難しいと思っている方々もありますが、新しく受講なさる方々から見るとGDM経験者のかたがたは、楽しんで自分から発言しているので驚いているようです。

GDMの良さは、クラスの雰囲気良くなるということです。各期が終わって感想をいただきますが、「とても楽しかった。」「先生がバッグからいろいろなものを出して授業するのでわくわく感がある。」という感想が多く皆さん授業の後、残ってお茶のみをなさる方々が授業の内容のことなども話しながら親しくなっていきます。授業の中で自分たちの現実のことなどをお話するので、お互いのことも自然とわかり、自分を飾ることなく意思疎通ができるのだと思います。

「今まで語彙を増やすことがいいと思っていたが、少ない語でも多くのことが表現できることが分かった。」「初めはとても易しいテキストだと思ったが、進むにつれてBasic Englishは奥深く、難しいけれど面白いと思うようになった。」という感想もあり嬉しく思います。「Basic Englishのほうが慣れていないので、分かりにくいこともある。使いこなすにはまだまだ時間

がかかる。」という方々もいます。金曜クラスの特に男性のかたがたは、学校時代に文法をしっかり学んできた方が多く、その方たちにとっては、Basic English をまた違う角度で英語を見直すことになり興味深いようです。その意味でも GDM 教授法で Basic English を学ぶ意義があると思います。

この Open College は、教師の定年が今年から決められたことで、あと2年だけ教えることができます。月曜の GDM クラスは3回目の EPBook 2 を終えたいと思っています。金曜クラスは Basic English の reading 教材、EP 1&2 の復習をしながら、より Basic English への理解を深めていきたいと思っています。

(フェリス女学院大学 非常勤講師)

# Plants in the Winter

Karakida Teruyo

It is the coldest time in the year now. The air is cold and the earth is cold. We go out in the cold wind with thick warm clothing on making ourselves shorter and smaller sometimes with our backs bent.

The trees are without leaves. Their uncovered branches seem quite dead. But there are some sorts of trees which are covered with green leaves. They keep green leaves on the branches all through the year. They are evergreen.

We take different sorts of vegetables for meals every day. They are important to keep our bodies healthy and sometimes give us pleasure.

The word *vegetable* is not on the BASIC ENGLISH list. The words about plants on the list are

flower, fruit, grain, grass, plants, rice (400 general)

apple, berry, branch, leaf, orange, potato, root, seed, stem, tree (100 Pictured)

THE BASIC DICTIONARY says

vegetable (food-) plant; garden produce

THE GENERAL BASIC ENGLISH DICTIONARY says

1 a. Of, coming from, to do with, plants

2 n. Plant, sp., sort used as food

We see some vegetables only in the limited time of the year and more vegetables almost all through the year. Potatoes, *carrots*, *cabbages*, *onions*, *spinaches*, *negi*(ねぎ), *komatsuna*(小松菜), *hakusai*(ハクサイ) and others are on the market almost all through the year. As the air becomes colder in the winter, their taste becomes sweet and rich.

Vegetable fields are frequently covered with white powder of ice or snow. Some vegetables are got up out of the cold earth and taken to the market. We get them at the store saying, "As it gets colder, they have better taste. They are sweet."

Why do they have a sweet taste in the winter? Vegetables have power or way of keeping themselves from being overcome by the cold in the winter.

They have very much water in them. Over 90 % of their bodies is made from water. If the air gets colder and colder then it gets to under 0°C, water is changed into ice. Do vegetables become iced and go to their death? No.

Make comparison between two sorts of water; one is common water which we usually make use of at different places, the other is water which has sugar mixed up in it. If the air gets to 0°C common water is changed into ice. But the other one is not. Sugar keeps water from being changed into ice. As amount of sugar in the water is increased, the colder the water has to be for being iced.

Vegetables have a little sugar in them. When winter comes and the air becomes colder, they

make more sugar in them so that they may not be overcome by the cold. How great and wise they are! As a result their taste becomes sweet and rich.

In the north some vegetables like *radishes* (ダイコン), *cabbages*, *carrots* and others are kept under the earth for a certain time on purpose to make them sweeter.

*Spinaches* are on the market all through the year. In some places a sort of spinaches are made inside the heated glass-house. When they are ready to the market, cold air is let in by keeping the windows open for about two weeks to make them sweeter. This sort is named "kanjime" or "chijimi". They are shorter and their stems and leaves are thicker. They are soft and sweet. They are on the market from November to February. It is the best time now for tasting them.

In the winter evergreen trees keep green leaves on the branches. Why is it possible to do that? They are strong in the cold. But in the heat of the summer if they are attacked by a sudden cold, the green leaves of them are unable to put up with it and goes to their death. From fall to winter, with the change from the warm air to cold air, they get ready for making more sugar in them. This is the key to the evergreen. The leaves in the winter will certainly be sweet. Will you have a taste of it to see if it is true? You may be ill. Because the face of them is coated with some poison to keep some birds, animals or insects away. You'd better not have a bite of them.

(I did this writing for Basic English Workshop in February, 2017)

Note: The words in italics are not on the list.

## 参考文献

田中修『植物はすごい』中公新書, 2017年7月

稲垣栄洋&三上修『身近な雑草のゆかいな生き方』ちくま文庫, 2011年4月

諏訪雄一『おいしさの作り方』小学館, 2006年6月

ステファノ・マンクーゾ『植物は「知性」をもっている』アレッサ・ヴィオラ&久保耕司訳 啓文堂/  
大熊整美堂, 平成27年11月

# 小学生を対象に実施した GDM 教室の記録

## A Record of my Home Teaching Class for Elementary School Students

合 川 麻 由

2016年5月から2017年2月にかけて、小学6年生を対象にGDMによる英語の指導を行った。2016年春時点までに5年間、中学生および社会人にGDMで英語を教えてきたが、小学生への指導は初めての試みである。学習指導要領の改訂によって、小学5年生から英語が正式教科となり、GDMは中高生や大人を対象にした場合と同様に小学生にも有用なメソッドであるか、自分の考えを明確にしておきたかった。

### 1. 年間の流れ

この試みは完全に個人で行った。私の5年間のGDMの蓄積は所属先のLINGUA LANGUAGE STUDIO（以降LINGUA）で培ったものだが、今回、会社から資金面や広報のサポートは一切受けていない。教室は自宅の一室を使用した。これは、GDM英語教授法研究会にも自宅に生徒を招き指導を行うホームティーチングを行っている会員は多く、GDM英語教授法研究会の啓蒙のためにも、ホームティーチングを金銭面や準備において負担なく行うスキルをつけたかったからだ。

自宅周辺には1km圏内に公立小学校が3校あり、それぞれ各学年平均60名の児童が在籍している。そこで、「小学6年生対象ただし小学5年生は応相談」として生徒募集を行った。ゴールデンウィーク明けの開講に向けて、実際に動き出したのは3月上旬だった。生徒募集、広告費として5万円程度を費やし以下の広報活動を行った。

- 地域情報誌（フリーペーパー）の教室紹介ページに文字広告を掲載
- 郵便局にポスターを掲示
- チラシを作成して、ポスティング

結果、反応は2件あった。それぞれ、ポスターを見て問い合わせたケースとポスターとチラシを見て問い合わせたケースだった。地域情報誌を媒体とした反応は一切なかった。両者とも説明会に参加の上、受講を決めた。説明会では、児童と保護者に対してI, You, He, She, Itの体験授業を実施した。

授業は月4回で各110分、祝日および長期休暇中は休みとして、2月までに授業を30回実施した。以下の表は、1回の授業の平均的な時間配分である。

表1 授業110分における時間配分

ライブ	休憩	ノートテイキング	板書読み フラッシュカード	ワークシート (解答含む)
40分	10分	25分	10分	15分

生徒が2名しかいないので、一人が休むとマンツーマンとなり、GDMらしいことがあまりできず、また両方とも男児であったため、年間を通して安定したクラスを成立させるために追加募集を行った。夏季休暇中に編入のための速習講座を開講し、7万円を費やして郵便局のポスター掲示および新聞折込を行い、1件の問い合わせ（小学4年生）があった。年齢が満たないため速習講座への受け入れを断ろうかとも考えたが、実際に説明会で会うと、その女児はとても賢くまた精神年齢が高い印象を受けた。女児から受けた印象と広告費の大赤字を軽減させたいという思いから、「ついてこれるかわからない」と伝えた上で速習講座を実施した。その結果、6日間という短期講座でputまでを完全に習得でき、また本人の強い希望があったので、9月以降は小学6年生2名と合流して3名で授業を実施した。

後で知って驚いたのだが、小学6年生は共に中学受験を予定していた。1月の授業の際に「受験前だからお休みして、受験終わってから再開してもいい。」と伝えたが、本人たちは「続けたい。」「受験勉強の気晴らしなんだ。」と体調が優れない場合を除き休まず通い続けた。生徒間の予定が合わず翌年度の継続は実現しなかったが、受講生たちは皆満足だったようで、アンケートからも受講を継続したかった様子が伺えた（図参照）。

## 2. 小学6年生と中学1年生の比較

約1年間におよぶ継続的な指導により、小学6年生の持つ能力がどのように中学生と異なるか、またその能力が向上していく過程を見ることができた。本人や保護者とのやりとりから、受講生の男児2名は幼稚でもないが特別大人びていることもなく、私が想像していた一般的な小学6年生の印象を受けた。ただし、双方とも中学受験をしたことから、学校では平均以上であっただろうと推測できる。

The image shows two examples of handwritten questionnaires. Each questionnaire has three numbered questions in Japanese. The first question asks for feelings about the course, the second asks for a message to the teacher, and the third asks if they want to continue. The handwriting is in black ink on white paper.

**Left Questionnaire:**

- 1. 授業の感想を書いてください。  
たのしい
- 2. 先生へメッセージを書いてください。  
授業がとても楽しいです
- 3. 秋以降、この期間の授業もつづけてくださいか。  
つづけてたい

**Right Questionnaire:**

- 1. 授業の感想を書いてください。  
この事ははやるが、勉強が面白いから  
もっと進めたい
- 2. 先生へメッセージを書いてください。  
先生が面白い、たのしみながら授業も
- 3. 秋以降、この期間の授業もつづけてくださいか。  
おもしろいので進めたいです  
たのしみながら

図1 7月に実施した生徒アンケート  
(1. 授業の感想, 2. 先生へメッセージ, 3. 継続したいか)

アンケート

1. 授業の感想を書いてください。

楽しかった

2. 先生へメッセージを書いてください。

分かりやすく先生はここは、あんなら

3. 今後、機会があればまたこのやり方で英語の学習をしたいですか。

とてもいいと思います、また甲斐、  
この2分、おけるコカイが、おもしろい  
いい

アンケート

1. 授業の感想を書いてください。

楽しかった  
先生は出来るように考えたと思ふ

2. 先生へメッセージを書いてください。

この年間で先生は出来た。英語が  
てきよな意味、おもしろい、おもしろい

3. 今後、機会があればまたこのやり方で英語の学習をしたいですか。

いい

アンケート

1. 授業の感想を書いてください。

わかりやすく、わからないところが  
すぐにわかった。発音の仕方が正かに  
わかるのでとても、やりやすいです。

2. 先生へメッセージを書いてください。

今まで、教えてくださったことが  
身につくといっています。本当は、  
ひま、ただ、楽しいので、これも、やりたいです。

3. 今後、機会があればまたこのやり方で英語の学習をしたいですか。

はい

図2 2月に実施した生徒アンケート  
(1. 授業の感想, 2. 先生へメッセージ, 3. 継続したいか)

## 2-1 集中力について

LINGUA の中学 1 年生対象のクラスは週 2 回でそれぞれ 110 分と 180 分である。無論中学受験を経験した生徒にとって 1 日 3 時間の授業はあまり負担のないように見受けられる。在籍生の 1 割は選抜のない公立中学校に進学しているが、集中力において中学受験経験者に大きく劣ることはない。

普段指導している中学生と比べて、小学 6 年生男児 2 名の集中力は 5 月開講時点で非常に低く感じた。110 分という授業時間が長くて最後まで集中力が持たないのではない。GDM のライブで大事なレビューの時間に当たる開始 10 分間において、子どもたちの集中力は古い電球のように灯いたり消えたりを繰り返し、直前にした動作や発話を忘れてしまう様子がみられた。そして、20 分を経過して頭が回転してくると決まって 1 名が睡魔に取り憑かれた。この児童は反応が良くすぐに *sen-sit* を把握する一方、一度納得してしまうと周りの声を聞かず、よそ見をすることが多かった。もう 1 名は周りの発話から推測して *sen-sit* を理解することが多かったので、退屈になって居眠りすることはなかったが、休憩前になると時計を気にして集中できなくなり体を揺らしていた。なお、2 名とも週 3 回ほど学習塾に通い、さらにテニスなど運動系の教室にも通っていたと聞いている。

小学 4 年生女子の集中力は、9 月時点で小学 6 年生男児たちより高く、授業終了まで途切れることがなかった。習い事は書道とピアノ、さらにバレイは週 2 回通っていた。また、読書が大好きで普段から推理小説を数時間で一気に読むなど、高い集中を継続できる能力を備えていた。

小学 6 年生の集中力は徐々に向上していき、年末年始の 1 ヶ月間の休暇の前後では特に大きな変化を感じた。彼らは 1 月時点で LINGUA の中学生並みに集中が持続できるようになっていたと思う。

## 2-2 書く力と描く力について

EP1 p.13 までの範囲の授業では、線画をホワイトボードに貼り付け周囲に英文を書き、線画と英文をすべてノートに写させた。そこには、線画を描くことによって改めて距離感や動作の変化を認識させる目的があった。

まず、小学校でのローマ字の指導効果は皆無で、小学 6 年生男児 2 名は共通して自分の名前を書けるようになるまで半年近くかかった。入学したての中学 1 年生においても名前の書けない生徒は頻繁に見られるが、小学生たちがアルファベットを書けるようになるまでには倍以上の期間を要した。

線画を描く能力については、文字の能力差以上に 1 学年の差を認識せざるを得ない。中学 1 年生の授業では線画を繰り返し描くことで、下手なりに一応理解しうるものに仕上げられるが、小学 6 年生の男児 2 名は第一に円や直線を描くことができず、スーパーマーケットなどで展示されている小学低学年のイラストと同じくらいの画力だった。開講から 1 ヶ月半までは線画に慣れることに重きを置いたものの、*take* 以降はきちんとした線画で英文を書いていけるように、ホワイトボードに貼る線画の縮小コピーをノートに糊付けさせた。これは小学生を指導する上での大きな妥協点であった。しかし、この変更によってノートテイキングの時間が短縮されることはなかった。線画をノートに写すのに費やしていた時間は、糊付けの時間にそのまま

移行したからだ。彼らにとって鉛筆と糊を交互に持ち替える作業は難しく、シャープペンシルが落ちたり糊が手についたりする度に集中が切れてしまった。

ノートテイキングは講師と受講生の両者にとって大変なものであったが、1年後の今はプリントのみにせずノートテイキングをさせたことに大きな意味があったと言える。内容が複雑になるにつれてノートに書き写す文や語の数は増えたが、各授業におけるノートテイキングの所要時間は年間を通じて変わらなかった。よって、子供たちのノートテイキングの能力は向上したと言える。速さだけでなく正確さもかなり向上したが、丁寧さの変化はあまり見られなかった。ただし子どもたちは時々受講開始時のノートを見せ合って「こんなに酷かった。」と笑っていたので、本人たちは成長を感じたようである。1月に線画の縮小コピーを用意し忘れた際、試しに久々に線画を描かせたら、以前は苦痛に感じていた線画を描く作業を楽しめるようになっており、「もう貼らない。自分で描く。」と言うので、その後縮小コピーを使うことはなかった。

編入のための速習講座を経て9月から合流した小学4年生女兒はノートテイキングの点からも年齢以上の能力を備えていた。アルファベットは小学校でローマ字を習った際に、完璧に書けるまで練習したようで、小学6年生男児の半分の時間で終わらせ、全員が終わるまでは何度も黙読しながら板書とノートを見比べていた。

受講生3名に共通した問題点は、線画ばかりを見て文字を読まないことだ。板書は1つの線画ごとにまず受講生が英文を読み、講師が各文を読んで受講生が真似をするという流れで行った。板書全体を読み終えたら、フラッシュカードを用いて進出単語を含め覚えてほしい単語を読む練習をしてから、再度板書を読み直した。しかし、受講生たちは文字認識能力よりも音の認識力が先に育ち、文字を追わなくても講師が発する英文を完全に真似できることに気づいてしまったようだ。

EPのCDを用いたディクテーション（“I am here.” など一文ごとに聴いて丸ごと書く）を行った際、子供たちはほとんどの単語のスペルを覚えておらず、CDから流れた一文を忘れないように何度もリピートしながら過去のノートやプリントから目当ての単語を探し当てていた。「候補の単語を板書しておけば親切なのに。」と思うかもしれないが、これは子どもの希望を汲み取ったものである（3-2にて詳しく記述する）。

### 2-3 ライブの理解度

LINGUAで中学生に教える際、意識的に行っていることの1つとして、優秀な生徒に対し退屈させないような授業づくりがある。例えばofの授業では、“The door of the room is open”という文と同時に“The window of the room are shut.”という応用的な文も言える自由を与えると、優秀な生徒はより複雑な文にチャレンジしようとする傾向がある。また中学1年生の夏期講習で惑星の名前（暗記は不要）など学校ではまだ教わっていないような単語を取り入れることで刺激を与えることもある。これらは学校とは異なる英語塾という特殊環境ならではの工夫でもある。生徒たちは「何か凄いことをやった」と感じた時に達成感を得るようだ。

これに対して、小学生たちに教える際は、いかにシンプルにできるかを常に考えて授業プランを立てた。少しでも飛躍があると既習事項においても間違えてしまい、自信や意欲を失ってしまうからだ。中学生に教える際に比べて、小学生たちがとても意欲的に学習していたアイテ

ムがいくつかあった。

- 冠詞 a と the の使い分け

椅子の脚を用いて “These are legs.” と “These are the legs.” を対照。

- numbers

数の概念の導入として、パンやスプーンの本数を数えた。数は6以下と7以上を2回に分けて扱った。最終的に “These are the numbers from ... to ....” と “These are numbers from ... to ....” の比較を行い、冠詞の使い分けをした。

- one, the other

袋に入ったボールやトランプを用いて記憶力ゲームの要領で導入。

- see

“I (You) see.” と “He (She) sees.” を速いテンポで交互に言わせて see と sees の使い分けの練習をした。

小学生にGDMで英語を教える場合、一番の不安はライブでの細やかなシチュエーションの違いが理解されるどうかである。上記のアイテムに共通するのは、2つのものを比較しているということ。白黒ははっきり区別できるようなものはわかりやすく、ゲーム感覚で学習できるので楽しかったのだと思う。

一方、“You put the bag on the table.” から “You put it on the table.” にする、いわゆる言い換えに対しては強い反発を示していた。全30回の授業でEP1 p.40まで進んだが、上記のitとthemはまったく受け入れてもらえなかった。したがって “put it there” は扱わなかった。

動詞の語形変化（未来形・現在形・過去形）においては、takeを導入してすぐにsen-sitの理解はできたものの、シチュエーションはわかるのに単語が出てこないといったジレンマに何ヶ月も苦しんでいた。

EP1には載っていないが red, blue, yellow, green, black, white は10月頃に紹介したが、子どもたちには「それくらい知っている。」と言われてしまった。しかし、numbersの授業の際には、子どもたちは全員身を乗り出して大きな声で発話していたので、単元よりもそれらの見せ方に興味関心の要素があるようだ。

### 3. 小学生に教えて気づいたこと

中学生と比較する以外にも、授業での小学生たちとのやりとりを通じて多くの学びを得た。特に共有したい2つを以下に記す。

#### 3-1 講師が使う英語について

GDMでは教えた英語のみを使って新しい英語を教えるが、クラス運営上の理由から教えないで使用している単語もある。生徒がきちんと言えた時に “Good!” と褒めたり、“Please” や “Thank you” といった言葉をかけたり、授業の開始時および終了時の挨拶として用いる “Hello” や “Good evening” と “Goodbye” のことだ。しかし、講師はこのような言葉にもっと神経を使わないといけない。以下に2つのエピソードを紹介する。

9月に give を導入した際、私の “I am giving the coin to you.” という発言を聞いた瞬間、小学6年生の反応の良い方の男児1名が「わかった!」という表情をした。そして嬉しそうに

“You are good evening the coin to me.”と言ったのだ。彼の発話は確信を持ってされたものであったため、訂正をされると残念そうな顔をしていて、しばらく自信がない状態が続いた。

11月の授業で、ノートテイキング中に小学6年生男児2名が日本語で「糊が手についた。」「早く書きなよ。」など言い合っていた。私は彼らに向かって思わず“No Japanese!”と叱ったのだが、小学4年生女児を含め全員が私の発言を聞いて首を傾げながら「日本がないの?」と言っていた。

今回の経験で「このくらいは知っているだろう。」「何となくわかっただろう。」という講師の考えは甘えに過ぎず、受講者にとっては意味のない音の塊であったり、誤解の種になってしまう危険があることを知ることができた。

### 3-2 こころの成長に対する工夫

小学生の子どもたちはライブ時も含め、間違えを指摘されたり既習事項を思い出せないときに講師に手助けをされたりすると、自信をなくして声量が落ちたり、不機嫌になるなど露骨に態度にでることがあった。中学生に比べ、感情のコントロールや精神面の成長に差があると感じた。そのため、子どもたちには極力ヒントを与えずに自分たちの力で答えを導けるように、中学生を指導時以上にレビューの準備を行った。また、ワークシートやディクテーションの作業時間を十分に確保し、必要であれば授業を延長してでも子どもたちが納得いくまで待つようにした。毎回の授業時でワークシート1枚程度を宿題にしていたが、2学期以降は授業後に残って終わらせてから帰る姿がよく見られた。

### 3-3 小学4年生と小学6年生の差

小学4年生の女児は前記の通り精神年齢が高かったので、小学6年生に合わせたカリキュラムでも始めは難なく受講できていた。しかし、1月を境に小学6年生たちの知能が伸びるとともに、授業で扱う英語の難易度もさらに上がったので、最後の1ヶ月程はわからないと感じることが増え、ライブの後半に集中力がなくなってしまうこともあった。

## 4. まとめ

小学6年生2名と小学4年生1名に5月から2月まで計30回の授業を実施し、GDMで小学生に英語指導を行う場合と中学生以上を対象にする場合でどのような違いがあるかを知った。GDMのシチュエーションにおける理解は中学生と同様であった。ただし、以下の3つの理由から、「GDMは小学生にも有用なメソッドであるか」において、私は否定的である。まず、中学生ほど成熟していない小学生たちにとって、母国語と異なる文字を持つ外国語を習得することは非常に大きな負荷を与えるということ。また、言い換えなど文の意味が同じものについて必要性を感じる知性がまだ育っていないので、一つのシチュエーションで言える英文が増えるにつれて、小学生たちの使う英語に不自然さが生じてしまうこと。そして、継続的に英語学習をすることで、ThisやThatで言えるものだけでなくThere構文など、より複雑な英文を扱うようになると間違いのない完璧な英文が言えなくなり、自信や意欲をなくしてしまうからだ。

最後に、自宅でホームティーチングをしたことで得られた知識を羅列しておく。それぞれ、

別の機会に詳しく書き、記録したい。

- 金銭的な負担と、部屋のキャパシティを考慮したコンパクトな道具
- 線画やワークシートをパソコン上のみで作成する技術
- 遠方にいる GDM 講師に対する授業運営サポート

ホームティーチングにおける一番の課題は、生徒募集の手段である。個人で行うことができる広報活動は金銭面でも信用面でも非常に限られており、結果期待していた受講生数の半分しか得られなかった。1年間の継続受講により初期投資の広告費を取り戻すことはできたが、何年も教室を運営させるためには1クラスの受講生数を確保し、年間の収支を黒字にしていく必要がある。研究会全体でもホームティーチングをする会員への広報活動の手助けとして、現在運用しているウェブサイト以外にもできないか考えていきたい。

# PIE (印欧祖語) の Etymon (語根音形) から把握する Basic 語彙と英語の Lexicon

後 藤 寛

## まえがき

英文の active reading/listening で未知の語に出くわした場合の対処法として、Basic 語など既知の語を目いっぱいよりどころに考えてみることに、またこれに関連する他の対処法について後藤 (2016) では、表題を『必携 最小限の語彙力で英語を読み、聴く方法：基礎語からの類推』(Getting the Root Sense of the Basic Words of English) として詳細に扱った。特別に Basic 本体の 850 語を基本とする語彙力と構文力しかない想定することで、一般の時事英文や文学英文などがどれだけ理解できるか? を考えてみた。Basic の力だけでは無理だと一般には考えられようが、果たして本当にそうであろうか? について考えてみたということである。

そして結論的に事実上ほぼ 100%、少なく見積もっても 80% 以上は analogical inference (類推) で文脈の主旨の把握・理解が可能だとした。Basic で徹底的に培った構文力があれば、あとは基本的に語彙力と各語の用い方としての usage (語法) 上の問題となろうが、Basic の最小限の語彙力があり、contextual reasoning (文脈推理) の要領さえ会得すれば、ほぼすべての英語文に対応できるはずだという趣旨である。

Basic はこれまでもっぱら能動的言語活動としての書き・話すための表現法から考えられてきたが、次のレベルとして今後はさらに受動的言語活動としての読み・聴くための「理解法」の観点からも追究される必要があろう。広く現実には書かれる英文や話される英文を、Basic という 1 つの尺度・物差しをあてがうことで考える意味の理解法ということになる。後藤 (同) はまさにこのあたりのストラテジー (秘策) に照準したもので、元原稿が 400 字換算で約 560 枚であり、テーマとしてかなり総括的に扱ったことになる。

本稿では限られた紙面の範囲内で、さらに今後のため発展的に考えてみる。C. K. Ogden 編集の *Psyche* 中の Vol. 9, No. 3 (Jan. 1929) [復刻版 (Reprint) 全 18 巻 (1995)] で、彼は 850 語の Basic English 語表 (旧語表) を 'Panoptic English' と名付け提示したが [panoptic < pan (= complete, full) + optic (= view, to see)], その後に 118 語を差し替え (実は 1 語不整合であるが) 最終的に提示したものが今日の語表 (新語表) である [便宜上、それぞれ「旧語表」, 「新語表」と呼んでおく]。旧語表から新語表へどのような語がどのように差し替えられたかなどは、後藤 (2007) [ベーシック・イングリッシュ学会 (名称は当時), 研究紀要 No.15] ですべて列挙示した。

たとえば旧語表では動詞は 16 語ではなく 13 語、他に 2, 3 の例を出せば名詞では carriage は選定されず cart のみであった。wheel は当初から選定されていた。また、旧語表では engine も motor も選定されていたが、新語表では engine のみとなった。さらにまた、旧語表では fog, ape であったものが、新語表ではそれぞれ mist, monkey と差し替えられた。その他、両者を一々対照すると興味深いことが分かってくる [後藤 (2007) 参照]。1 語不整合と言ったが、実は旧語表に open が重複して 2 語あるのでこれとの関係か、あるいは原版から復刻版への過程でのミスなのかもしれない。なお、国際語彙等々の別枠の語 [便宜的に「プラス  $\alpha$

語」と古くから筆者は呼んできた]を設定する発想は当初はなく、850語(849語?)のみであった。プラス $\alpha$ 語の設定により $850+\alpha=\infty$ (無限大)という象徴的で簡素な方程式が立ち、これを「Basicの黄金方程式」としておこう。

いずれにせよ、英語の全語彙体系としてのlexicon(レキシコン)をひな形で手早く鳥瞰(bird's-eye view)するのに、まずはC. K. Ogden選定によるBasic 850+ $\alpha$ 個のlexeme(語彙素)への注目を第一主義('the Basic words' first)とすることは、やはり何かと都合がよいのである。

## 1. PIE Etymon と Basic 語の原音／原義

historical linguistics(歴史言語学)やcomparative linguistics(比較言語学)の分野でのlexicology(語彙論)の範疇となるが、英語のいわゆるetymology(語源)に関しては、文献でも英語の古英語・ギリシャ語・ラテン語などに由来を求め、初出年代などが記される形であり、それなりにその由来は明かされても「音変化」の推移までは一般には示されない。歴史を先史時代まで遡(さかのぼ)って発生源から、すなわち音声を示すPIE / pai / (Proto-Indo-European) [印欧祖語]の推定etymon(語根音形)を振り出しに、各語のroot sound(原音)とroot sense(原義)を結びつけ、他の同源・同系語を語群として一括するlexicon(レキシコン)は限られている。したがってparonym(同系語)とともに英語語彙を総括的に把握するには、一般向けには十分でないのが実情である。

簡素な意味をもつPIEの推定上の(phonetic) etymonは米国のJ. T. Shipley(1984)やC. Watkins(2011)などにより目下、約20,000語の意味をカバーする約3,000個が復元されている。これらの専門文献を参考に、後藤(2016)ではBasic語彙を軸にこの約3,000個のPIE語根のうちの1/20になるが、発展性があり最も基本となると考える150個を抽出し、これを150種の語群として一括分類した。簡便で使いこなすための「Basic語から把握する語源活用辞典[事典]」(glossary)的なものとしたので、巻末の〈索引〉などを縦横に活用すれば、約10,000語の意味が類推で理解できる潜在性を秘めていることを示唆した。知識を整理できるよう150種を25種ごとで区切り、6種の「試問」も提示した。確認上の便を考え、例はすべて本文の頁順とした。

本第一節ではさらに慣れるため、まずは以下にこれに準じた形式で新たに別な6種の試問を類例として提示してみる。考え方はすべて後藤(同)の本文で示しているのでここでは割愛するが、それを参照すればすべて正解できる。一々つき合わせて見ていけるよう正解は各類例の末尾に示す。この種の類例は他に無限に提示可能であるが、**Basic語をよりどころに他の一般語の意味も音感と語感から類推できる**ことの示唆が、ここでの趣旨である[この手法を「語根照合(法)(etymon collation: EC)」と呼んでおく]。この程度のは基本であり、難しいとは言っておれない。そもそも基礎語であり、Basic語でもある語のroot sound / root senseに関わることであり、真に把握すれば実感できる英語語彙のとらえ方・理解法となるはずである。慣れるとこの程度のはほぼ瞬間に感知され、正解できる。音感と語感とはそういうことになる。各語を見やすいようすべてBasic語は太字体、プラス $\alpha$ Basic語はイタリック体、un-Basic語は標準体とし区別する。

試問類例 1 [cf. 後藤 (2016), pp.52-53]

1) 次の各々 a)~j) の Basic 語と同源・同系の Basic 語は、下の①~⑩のうちどれか。

- a) wash    b) religion    c) ship    d) door    e) take  
f) window    g) ready    h) stomach    i) prison    j) stop

\* \* \*

- ① for    ② line    ③ mouth    ④ road    ⑤ skirt  
⑥ step    ⑦ surprise    ⑧ tax    ⑨ wind    ⑩ winter

2) 次の各々 a)~l) の Basic 語と同源・同系の語は、下の①~⑫のうちどれか。

- a) chief    b) tongue    c) stretch    d) ticket    e) shirt    f) train  
g) touch    h) carriage    i) attention    j) throat    k) prison    l) river

\* \* \*

- ① arrive    ② belong    ③ capital    ④ carpenter    ⑤ district    ⑥ drag  
⑦ etiquette    ⑧ pretend    ⑨ prize    ⑩ shore    ⑪ taxi    ⑫ thickness

〈正解〉

1) a) ⑩	b) ②	c) ⑤	d) ①	e) ⑧
f) ⑨	g) ④	h) ③	i) ⑦	j) ⑥

2) a) ③	b) ②	c) ⑤	d) ⑦	e) ⑩	f) ⑥
g) ⑪	h) ④	i) ⑧	j) ⑫	k) ⑨	l) ①

試問類例 2 [cf. 同上, pp.84-85]

1) 次の各々 a)~j) の Basic 語と同源・同系の Basic 語は、下の①~⑩のうちどれか。

- a) meal    b) plant    c) harmony    d) true    e) present  
f) bite    g) see    h) work    i) name    j) same

\* \* \*

- ① art    ② boat    ③ design    ④ flat    ⑤ music  
⑥ natural    ⑦ representative    ⑧ seem    ⑨ tree    ⑩ worm

2) 次の各々 a)~l) の Basic 語と同源・同系の語は、下の①~⑫のうちどれか。

- a) face      b) meal      c) floor      d) rule      e) tree      f) soup  
 g) bit      h) second      i) turn      j) condition      k) name      l) same

\* \* \*

- ① beetle      ② dictionary      ③ explain      ④ factor      ⑤ mill      ⑥ noun  
 ⑦ region      ⑧ sequence      ⑨ sincerely      ⑩ sip      ⑪ stir      ⑫ truth

〈正解〉

1)

a) ⑤	b) ④	c) ①	d) ⑨	e) ⑦
f) ②	g) ③	h) ⑩	i) ⑥	j) ⑧

2)

a) ④	b) ⑤	c) ③	d) ⑦	e) ⑫	f) ⑩
g) ①	h) ⑧	i) ⑪	j) ②	k) ⑥	l) ⑨

試問類例 3 [cf. 同上, pp.110-111]

1) 次の各々 a)~j) の括弧に入る 同系の Basic 語を、下の①~⑩から1つ選ぶとどれか。

- a) sky, (      ), shoe      b) pin, point, (      )  
 c) question, request, (      )      d) paste, (      ), food  
 e) (      ), yellow, glad      f) (      ), seat, desire  
 g) blood, blade, (      )      h) offer, (      ), sport  
 i) (      ), guide, envy      j) opinion, operation, (      )

\* \* \*

- ① company      ② copy      ③ different      ④ flower      ⑤ gold  
 ⑥ side      ⑦ skin      ⑧ pain      ⑨ quality      ⑩ view

2) 次の a)~e) の各語群の語のうち、1つ 同系でないものはどれか。

- a) ① radio      ② rest      ③ root  
 b) ① material      ② mind      ③ mother  
 c) ① birth      ② breast      ③ breath  
 d) ① glass      ② gold      ③ guide  
 e) ① fail      ② fall      ③ flower

〈正解〉

1) a) ⑦	b) ⑧	c) ⑨	d) ①	e) ⑤
f) ⑥	g) ④	h) ③	i) ⑩	j) ②
2) a) ②	b) ②	c) ①	d) ③	e) ③

試問類例 4 [cf. 同上, pp.129-130]

次の①～⑤の各語の構成要素分解で、それぞれ括弧の中に示した文字で始まり、同じ意味となる名詞または形容詞の Basic 語を入れると何か。

- ① emergency [e (=o) + mergen (=m) + -cy]
- ② embarrass [em (=i) + barrass (=b)]
- ③ illumination [il (=on) + lumin (=l) + -ation]
- ④ release [re (=back) + lease (=l)]
- ⑤ event [e (=o) + vent (= (to) c)]

〈正解〉

① out, mark	② in, board	③ light	④ loose	⑤ out, come
-------------	-------------	---------	---------	-------------

試問類例 5 [cf. 同上, pp.149-150]

1) 次の a)～f) の各々、左側に示した語の意味は、下の①～⑥の日本語のうちどれか。

- a) vigil ( ) ⇔ **awake**
- b) decommission ( ) ⇔ **committee**
- c) breach ( ) ⇔ **broken**
- d) frail ( ) ⇔ **brick**
- e) host ( ) ⇔ **hospital**
- f) dent ( ) ⇔ **tooth**

\* \* \*

- ①ひ弱な
- ②解体する
- ③違反
- ④くぼみ・へこみ
- ⑤徹夜
- ⑥動植物の宿主 (しゅくしゆ)

2) 次の①～⑧の括弧の中に、下の a)～h) の Basic 語 (句) を入れるとどれか。

- **probable** [prob (= ①) + able (= able)]
- **vegetable** [veget (= ②) + able (= able)]
- **ambition** [amb (= ③) + it (= ④) + -ion]
- **special** [spec (= ⑤) + -ial]
- **escort** [es (= ⑥) + cort (= ⑦)]
- **spend** [s < dis (= off, away) + pend (= ⑧)]

\* \* \*

- a) approval   b) garden   c) hanging   d) living  
 e) out          f) to go      g) to see      h) walk

〈正解〉

1) a) ⑤	b) ②	c) ③	d) ①	e) ⑥	f) ④
---------	------	------	------	------	------

2) ① a)	② d)	③ h)	④ f)
⑤ g)	⑥ e)	⑦ b)	⑧ c)

試問類例 6 [cf. 同上, pp.168-169]

1) 次の各々①～⑩の語と同源・同根の Basic 語 を、下の a)～j) から選ぶとどれか。

- ① sing          ② *heritage*   ③ whole          ④ anxious      ⑤ razor  
 ⑥ riddle        ⑦ commercial ⑧ pluvial        ⑨ repeat       ⑩ auction

\* \* \*

- a) angry        b) authority   c) competition   d) fly            e) going  
 f) healthy      g) market     h) rat            i) reading      j) sound

2) 次の (1)～(4) のそれぞれ左側の un-Basic 語 の意味を、括弧の中に示した文字で始まる Basic 語 1 語で示すと何か [注、Halloween は Basic 語の範疇でもある]。

- (1) Halloween [hallow (= *holy*) + een < *evening* (= e        ) **night**]  
 (2) neutral [ne (= n        ) + utral (= o        )]  
 (3) method [met (= **after**) + hod (= w        )]  
 (4) gesture [gest (= (to) s        ) + ure]

〈正解〉

1) ① j)	② e)	③ f)	④ a)	⑤ h)
⑥ i)	⑦ g)	⑧ d)	⑨ c)	⑩ b)

2) (1) early	(2) not (no), out	(3) way	(4) send
--------------	-------------------	---------	----------

以上、どれも基本的なもので、発生源から音感とともに本当の意味での Basic 語の原音と原義 (root sound / root sense) を知る基本ステップとなる。発展性があり、他に無限に類例は考えられると上ですでに言ったが、ここでは解説は省略し PIE の etymon (語根音形) を背景

に新たに100例近くを提示した〔後藤(2016)では別な約140例を提示した〕。解説・考え方は同書本文中で示されていて、参照すればすべて必ず正解できるともすでに言った。巻末に枚数にしてわずか4枚(8頁)の〈索引〉を付けているが、1頁にさえ収まるこの小さな索引体系が、英語 lexicon の核心部を一望する大きな1つの panopticon (パノプティコン) となると考えている〔panopticon は1点から内部がすべて見渡せる円形の建築物のことから来ていて、刑務所のことともなった語である〕。徹底的に使いこなせば音感とともに語の意味が根本から見えてきて、他の語の意味も推し量ることが可能なはずである。音節中の音声、それも特に stressed syllable (強勢のかかる音節) の consonant (子音) に root sense (原義) が隠れていることが多い。音と語形(スペリング)の関係〔phonics (フォニックス)〕からも類推する勘が芽生える。また、書かれた英語の deep reading (深読み)、話された英語の deep hearing (深聴き) にもつながる。

上での例で1つだけ触れておくと、試問類例2の1)、2)でBasic語biteの同系語としてbit、boatを扱ったが〔boatは「水を噛んで(切って)進む乗り物」〕、さらにこれはbitterとも同系である。また、un-Basic語のbeetle(カブトムシ)とも同系として扱ったが、カブトムシは「噛む虫」である。Lockhart, L. W. (1987, pp. 85-88)はbiteの意味の説明として、ワニの挿絵(イラスト)をいくつも用いているが、同系語を教える趣旨ではlexigram(レクシグラム・絵文字)としてワニよりカブトムシのbeetleのほうが、より示唆的でよからう。

学校教育でも入門期は別にして、それ以降は本稿全体で示唆する考え方を適宜採り入れていけば、語彙力養成上で泥縄式ではない実感のもてる英語 lexicon のとらえ方となり、効果的で手早い方法となる。確固とした自信にもつながる。浸透すれば無理のない範囲内で高等教育機関としての大学・大学院の入試問題ともなりうる。大学の入試問題が変わらなければ高等学校までの初等・中等教育機関の教育内容が変わらないと言われるが、逆であろう。大学入試は特に高等学校での履修内容を踏まえそれに準じて出題されるわけで、日本の英語教育の実情を踏まえれば、「理解力」を求める大学入試英語問題は細部は別にしても、概して特別に悪いわけではない。伝統的に大学入試問題が基本的には変わらないのは、順当だからである。このあたりに関連し、次節冒頭でまずは扱ってみる点がある。

## 2. 未知語の意味の既知語からの類推: Phoneme (音素) vs. Morpheme (形態素)

英語の各語における「音(特に強勢のかかる音節の初頭子音)と意味」を一体化して把握する方法は日本の学校教育でまるで扱われていないが、かつて大学の入学試験問題に次のような形で出題されたことがあり、その一端が垣間見られるものが実はあった。40年近く前の1979年(昭和54年)度に名古屋大学で出題された入試問題で、類義語としての shake, quiver, quake, tremble, shiver, shudder の意味に関するものである。最初にこの6語の各々の定義的意味説明が英文でなされ、それを参考に空所に shake は除いた5語を正しい語形に入れるのである。shake が最も一般的な語だという英文説明もなされているが、shake はまさにBasic語である。今なおこの問題のコピーが手元にある。ここでは前半部での定義的英文説明は省略し、後半部の空所を補充する形の文を提示する。

- (1) ( ) in the icy wind, the young girl wrapped her coat tightly around her.
- (2) We felt the ground ( ) tremendously beneath us as the rocket blasted off.



すべて単文で示してみた。一般にはこういう独立した単文としてではなく、文脈依存で意味を推し量るのでもあるが、それぞれ下線で示した語の例を順次考えてみる。

1) の somberly は小説文などによく現われるが、どういう意味か？ これはラテン系の語で、スペイン語からそのまま英語に入った sombrero (ソムブレロ・帽子) ともなった。印欧祖語 PIE の推定 etymon (語根音形) は, somberly, sombrero とは音的にもかけ離れて響くが /ANDHO-/ が定説で、「陰(かげ)・日陰・影」を意味した。「暗いこと」の意味でもある。「語根照合 (EC) で未知の語は既知の語から類推する」と言ったが、実際問題としてわれわれは Basic 語以外にも「ソムブレロ」の例のような外来語としてカタカナで示される語を含め、他の語の知識があるわけで、既知の語があればそれを手掛かりに考えればもちろんよい。Basic 語の語彙力しかない想定すれば、実はこれは **umbrella** と同系語 (paronym) の関係にあり、これをあてがっても考えられる [以下、引き合いに出す語のうち本体の 850 Basic 語はそれが初出の場合にだけ太字体、プラス  $\alpha$  Basic 語は使い方で制限のあるものもあるがすべてイタリック体とする]。

Basic 語の umbrella は [umbr (=shade)+ella (=small)] と morpheme 的に要素分解され、「小さな影」の意味をもっている。somberly そのものは [so (=under)+mber (=shade)+ly] と分解されるが、こういう要素分解では基本的にすべて Basic 語で意味は示される。別な言い方をすれば、**ほぼすべての英語語彙は何らか Basic 語の意味を背景にもっている**と言える。なお、un-Basic 語の shadow も、Basic 語 **shade** と同系である。もうこれでこの 1) は、「彼はそれを憂えて(陰うつな気分で)言った」のような意味だと理解できる。ついでながら、スペイン語で「陰・影」のことは **sombra** である。

他の例は限りがないが、たとえば concoct (調理する) は第二音節に強勢がかかり Basic 語の **cook**, 第一音節に強勢のかかる scamper (走り回る・飛び回る) は **canvas**, tang (特有の味・香り) は **tongue**, pungent (強い刺激性の・びりっとする) は **point** などとそれぞれ同系である。scamper は [s < ex (=out)+camp < canvas+er (=frequently)] と考えればよい。Basic 語の canvas も un-Basic 語の camp (野営地) も印欧祖語 PIE の etymon /KAND-/ からで、根底では同じ「空(くう)で、何もないこと」の意味で、色彩的には「白」の感じと言える [色彩との関係も後藤 (2016) で扱っておいた]。語法上 tang は the tang of the sea air, pungent は the pungent smell of the chemical substance などと言える。

また, nascent love (芽ばえかけた愛) の nascent は Basic 語の第一音節に強勢が置かれる **natural** などからの類推, abdicate ([王位などから] 退位する) は [ab (=against)+dic (=to say)+-ate] で Basic 語 **against**, **say** から理解もできる。dic は PIE etymon /DEIK-/ に由来する。granary (穀物倉), gravel (砂利) は双方とも Basic 語 **grain** の意味が背景にある。PIE etymon は /GHREN-/ である。glaze は Basic 語 **glass**, 第二音節に強勢のかかる perturb は **turn (trouble)** などとも同系語で, Her eyes were glazed. (彼女の目はかすんでいた), I was perturbed over it. (私はそのことで不安であった) などと言う。それぞれ PIE etymon /GHEL-/、/TERə-/ に由来する。音を示す印欧祖語の語根を意識下に置くと、総合的に意味と一体化させ類推・判断できる勘が芽生えてくる。

なお、意味の核として本来の語根部も強勢アクセントの位置が、接頭辞や接尾辞が付加されることなどにより、移動することはもちろんある。たとえば上の例の abdicate の語根部は dic

であり意味の核もこの部分にあるが強勢アクセントは第一音節、名詞としての派生語 *abdication* となると第三音節に強勢アクセントの位置が移動し、語根部の *dic* はどちらも弱音化して現われる。音から意味を把握する上で、語根部が弱音化して現われる場合にも留意が必要である。

また、たとえば *Achilles' tendon* (アキレス腱) の *tendon* には「張りのあること、引っ張ること」の意味がある。PIE etymon は /TEN-/ で Basic 語の *attention* などと同系である。では *stomatitis* の意味は何か? Basic 語 *stomach* が想起されるが、注意が必要である。*stomach* の PIE etymon は /STAMƏN-/ (/MENT-/ ) と推定されていて、意味は「張りがなく膨(ふく)れていること」で、Basic 語 *mouth*, *mountain*, *amount* にもなった。*stomach* (腹・胃) も膨れているものである。接尾辞 *-itis* は「炎症」の意味で *stomatitis* は [*stomat* (= *stomach*) + *-itis* (= *burning pain*)] と要素分解されるが、これは胃炎ではなく「口内炎」の意味となる。

さらに、一般には既知の語の例であるが、*clarinet* (クラリネット) は Basic 語の *clear*, *mouse* (ネズミ) は *muscle* をあてがってみればよい。それぞれ同系語である。*clarinet* は澄んだ *clear* な音を出す楽器である。*mouse* と *muscle* は形状から納得できる。容量の単位で Basic 語の範疇に入るが *pint* (パイント) は、容器にペンキを塗って示したことに由来し、いわゆる Basic 語 *paint* と同系である [1 pint = 約 0.5 liter]。 *knead* (もむ) は Basic 語 *knot* などと同系である。また、*tailor* (仕立て屋) は Basic 語 *detail* と同系で、これはプラス  $\alpha$  Basic 語 *retail* (小売り) と同系であるし、un-Basic 語 *curtail* (削減する・短縮する) などの語ともなっている。語根 *tail* は「切ること」の意味である。

2) の *gave a cluck of amusement* は「嬉しがつて舌打ちをした」の意味であるが、*cluck* /klʌk/ は擬音語なのである。意外に見落とされるのが英語語彙での *onomatopoeia* / *echoic word* (擬音語) である。日本語には特別に *mimetic word* (擬態語) とともに擬音語も多いが、英語語彙にも発生的に擬音語であるものの数は驚くほど膨大である。擬音語は小説文などに頻出するが、見落とされる。*cluck* は「舌を鳴らすこと」である。

Basic 語の *cough* なども語法的に *The engine is coughing*, 「エンジンがガタガタいっている」とも言え擬音語であるし、*laugh* も元々は擬音語という説がある。実は *baby* も元来が擬音語で un-Basic 語 *babble* (ぶつぶつ言う) ともつながっている。語尾の *le* は *diminutive* (指小辞) で、反復の意味である。なお、一説として *flag* (旗) も擬音語とするものがある。一方、「平らであること」を意味する PIE etymon の /PELə-/ (/PLAT-/ ) から来た *plane*, *plate*, *flat* (初頭子音 /p/ → [f]) などと同系とする説もある。前者の擬音語説をとれば「パタパタ、ヒラヒラと揺れる音」から来たことになる。英文の深読み／深聴きで、見落とされがちな擬音語への注目は重要である。

関連して *squirm* (もがく・もじもじすること) という語はどこから来たか? である。これは目下、定説とまでは言えないが特記しておきたい。この語の音素 /skwɜːm/ に注目してみると、[wɜːm] の音が聞こえてくる。語根照合 (EC) で Basic 語をあてがってみれば、まさに *worm* [PIE etymon は /WERG-/ ] である。さらに特記すべきは、*squirm* の *squi* の部分には [skwi] の音も響く。そこでここに *squid* (イカ) を想定し、*squirm* は [*squi* (d) + (wo)rm] の *hybrid* (混成語) であろうという仮説も出されている。さらにこれは *squirt* (噴出する・ほとばしり) との関係も見え隠れするが、*squid* (イカ) は口からすみを吐くこととも絡

めて考えると、この語のルーツには興味を抱かさせる。squirt は元来は擬音語である。またさらには squiggle (もがく・走り書きする) という語もある。やはり擬音を基底にしている語であろう。なお、worm は un-Basic 語の swarm (虫などの群れ) とともに根元ではつながっている同系語である。

3) の mesmerized (催眠術にかけられる・魅惑される) は、Basic 語など既知の語の語根に何とかよりどころを求めようとしても、何も出てこない。これは 18~19 世紀のオーストリアの医師の名 F. Mesmer (F. メスマー) に由来する。mesmerize は手品のように暗示にかかる感じで「彼ら全員は暗示にかかり、うっとりした」の意味である。なお、類語に hypnotize があるが、これはギリシャ神話の眠りの神 Hypnos (ヒュプノス) から来た。

英語語彙には固有名詞を起源とするものも意外に多いので留意点となる。galvanize (電流を通す・人に衝撃を与える)、galvanic (感電したような・どきっとさせる) などもいわゆる語根をもっているのではない。人名からで、18 世紀のイタリアの物理・生理学者 L. Galvani (L. ガルバーニ) に因んだ語である。ogdenized English などと言えば提唱者名 C. K. Ogden に因む造語となり、いわゆる「Basic 英語」の意味で許容もされよう。Ogdenese / ogdenese 「Basic 風の文体」として用いてもよかろう。Ogdenites なら「オグデン派の人々」で、men and women working together as lovers of Ogden's theory の意味となる。ogdenic (Basic 的な・オグデン的な) などという造語も可能となろう。

4) の covetous (動詞形は covet) は上の 3) とも関わるが、これも実はローマ神話での神 Cupid (キューピッド) が背景にある。PIE etymon は /KWĒP-/ である。Cupid (クピッド) は女神 Venus (ビーナス) の子で愛・欲望 (love / desire) の神と言われ、ギリシャ神話での神 Eros (エロス) に相当する。cupidity (貪欲)、concupiscence (色欲)、concupine (内縁の妻) などという英語にもなり、これらにはいずれも Cupid が隠れている。英語にはギリシャ・ローマ神話を受け継いでいるものや、キリスト教思想を背景とする語が相当数ある。covetous は「欲をもった」であり、4) は「あなたはその財産に欲がある」の意味である。

キリスト教的には、たとえば crucial (欠くことのできない・重要な・命にかかわる)、crucify (十字架にかける・苦しめる) などはプラス  $\alpha$ Basic 語 cross (十字架) をもっているし、criss-cross (十文字を書く・縦横に動かせる / 動く) の criss は Christ (キリスト) の名から来ている。パーティの後で I got a giddy time there. 「私はあの場で浮き浮きした気分だった」などと言う場合の giddy の背景には、プラス  $\alpha$ Basic 語の God がある。こういう思想的・文化的な面にも留意が必要となる。日本生まれの、日本育ちの、日本人にとってはこのあたりは難点ではあるが、英語に関わっていく限りは避けられない。

5) の invest は即座に「投資する」などと理解されるが、原義は「衣服を着る / 着せる」の意味で、この文例は語法 (usage) 的観点からも注目に値する。invest はラテン系で vest (ベスト) からでもあるが、そもそもの発生源としての PIE etymon は /WES-/ で、これからその後ゲルマン系では wear という英語にもなった。ラテン系では /w/ が /v/ (/w/ → [v]) と変異したわけであるが、/w/ と /v/ が意味を区別しない同じ phoneme (音素) だということになる [こういう一般的な子音変異に関してはいわゆる Grimm's Law (グリムの法則) から、また母音変異に関しても O. Jespersen 命名による Great Vowel Shift (大母音推移) の例など含め、後藤 (2016) で分かりやすく説いた]。

invest には、強勢のあるはずとなる第二音節に注目し語根照合で考えても、適当な Basic 語は 850 語本体の中にはさしあたっては見当たらない。しかし *investment* はプラス  $\alpha$ Basic 語で、ここから解ける。そもそも接頭辞の in- に注目すれば、何かを「入れること」であることには間違いはないはずと推理できる。同時に上記、/v/と/w/の差し替えから同系語のレベルでの vest, wear まで類推できれば、その上位語としての「布」を意味する Basic 語 *cloth* から、「衣類」の意味の *clothing* を想起することには難はなかろう。invested が動詞であることからすれば clothed と置き換えもできるが、いずれにせよ「中に入れること、着せること」から類推・推理すれば、5) は「われわれは彼に全権を与えた」の意味だと理解できよう。この文での with の語法からの意味解釈もポイントと言える。「全権が彼にある (with)」ということである。動詞としての vest は、Basic 語で言い表せば 'to give the power or right' の意味をもつ。

ところで、上記のような語源的な paronym のレベルで考えることは別に、synonym のレベルまで拡張してさらに付け加えておくと、*clothing* の類義語のうちの 1 つにプラス  $\alpha$ Basic 語の *robe* (衣服) がある [Basic では韻文用語として C. K. Ogden が選定した語の 1 つである]。実はこの *robe* は un-Basic 語の rob (盗む) と同系語の関係にある。音形にも共通点があり、印欧祖語 PIE etymon は /REUP-/ として知られている。語尾の音素 /p/ → [b] と考えればよい。また、rob の類義語に steal があるが、同系語ではない。steal は衣類とは関係がない。PIE etymon は /STA-/ である。steal の同系語には、初頭子音に /st/ をもち「立つこと・立っていること」を意味する Basic 語の *stage, stem* など多くがあるし、un-Basic 語 stand, stalker など同系語は実に多い。

rob と steal は大きく違う。法廷裁判でこの両者の使い分けを間違えて英語で証言されれば、判決に大きな差が出よう。本来的に rob は「強奪行為をする」であり、steal は「窃盗行為をする」である。両者の中立的意味を提供するのが Basic 語の *take* ということになる。take の PIE etymon は /DEG-/ (/TAG-/) で、「触ってみること」が原義 (root sense) である。take は Basic 語 *tax* や、プラス  $\alpha$ Basic 語 *texture* などとも同ルーツをもっている。すべて原音そのものを示す PIE etymon は、音とともに細かい語義 (意味ニュアンス) を感知させ、英語の語感がメキメキと身につくこととなる。

それではなぜ先史時代の印欧祖語民族の言語 PIE で、*robe* (衣服) と rob (強奪する) が同じ音形 /REUP-/ に由来し同系語関係となったか? である。歴史的にはローマ時代となるが、新約聖書「使徒行伝」20 章 32-33, 35 節に次のような記述があり参考となる。手元にある Cambridge Univ. 版のハードカバーで、貴重な 1949 年刊の初版本 *The Bible in Basic English* から引用する [プラス  $\alpha$ Basic 語のイタリック体提示、下線、中略は筆者]。

And now, I give you into the care of *God* and the word of his *grace*, which is able to make you strong and to give you your *heritage* among all the *saints*. I have had no desire for any man's silver or gold or clothing... There is a greater *blessing* in giving than in getting. — (Acts 20: 32-33, 35)

これは使徒パウロ (Paul) の言説であるが、もう意味解釈はできる。そもそもエデンの園 (Garden of Eden) で裸であったアダム (Adam) とイブ (Eve) に神が与えた衣食住のうちの「衣」であったが、その後それを人間の *desire* (欲) が金・銀とともに強奪してきたわけである。英語の *robe* は原義が「分捕り品、戦利品、トロフィーとしての衣服」であった [trophy

<turn, etc. </TERə-/〕。身体の一部である衣服を剥ぎ取り (divest, disrobe), 強奪 (rob) する行為 (追い剥ぎ) の戒めである。動植物の皮から編まれ, 動物のうちの人間だけが身に着ける apparatus (装備品) としての衣 clothing は, まさに金・銀と parallel (同等・対等) なものとして先史時代以来, 人間社会でいろいろな意味で基本的な part (役割) をなしてきたことになる。clothing は衣ばかりでなく, 靴や帽子などの装備品までも含む。「服装」を意味する英語に apparel (アパレル) があるが, 既知の Basic 語を手掛かりに, それをあてがって考えれば apparatus, parallel, part などは同系語として見えてくる。これらの PIE etymon は /PERə-/ (/PAR-/) である。

なお, プラス αBasic 語に eruption (火山の爆発) があるが, これも同じ PIE etymon /REUP-/ に由来し, robe, rob と同系の語である。さらに un-Basic 語の corruption (墮落・腐敗・贈収賄), bankrupt (破産) なども同系列の語である。ただし, bankrupt の前部の bank はプラス αBasic 語で「銀行」の意味で用いるが PIE etymon が /BHEG-/ で, 元来「盛り土・棚状になった場所」の意味である。この語尾の音素 /g/ が [k] へと変異 (/g/ → [k]) し, bank として英語になった。いずれにせよ bank は「土手, 堤」であり, 「銀行」は二次的な意味である。

bank と聴いて一瞬に銀行をイメージするのは現代人であり, 元は盛り土で土手となった場所 bank が商取引や両替の場として利用されたわけで, これは un-Basic 語の bench などとも同系として知られる。bank の語感を獲得すると, たとえば 'a bank of lights over the stage' は「舞台照明の列」の意味と直感でき, 理解もできるようになる。

こういう例は他にいくつもあるわけで, たとえばプラス αBasic 語の club はいわゆる「クラブ」の意味で用いるが, 原義は「こん棒」である。ゴルフなどの club は原義での言い方となるが, こん棒をもって「人が寄り集まる場所」から, 現代の運動クラブやナイトクラブなどの意味での club となった。トランプの club はこん棒のデザインから来ている。ナイトクラブと言ったが, バー (酒場) の bar もプラス αBasic 語で「木の板 (棒)」が原義であることは比較的よく知られていて, やや似た面がある。bar は Basic 語 board, プラス αBasic 語 barrel (樽 (たる)), また un-Basic 語 border (境・国境), barricade (バリケード), barrier (障害), embarrass (当惑させる) などとも同系である。

上記, トランプ (trump: 切り札) と関連し, Basic 語 spade (鋤 (すき)・スペード) は「薄手の棒切れ」が原義で, これは Basic 語 spoon と同系である。また「棒」といえば, Basic 語 stick の同系語に un-Basic 語 staff がある。「スタッフ」はいわば「用心棒」ということになる。さらに「トランプ」といえば, 第 45 代米国大統領 Donald Trump の姓 Trump は un-Basic 語 triumph (勝利) と同系, Donald は 'ruler of the earth' 「世界の支配者」の意味をもつケルト系の代表的な名で, Donald Trump とはまさにスケールの大きいフルネームということになる。

最後にもう 1 つだけ例を出しておく, ビジネス/経済学用語としてのプラス αBasic 語 purchase は「購入」の意味で用いるが, 簡素な原義は「(追っかけて) 獲物の頭をつかむこと」である。この purchase は phoneme / morpheme 的に [< pur (=for, before) + chase </KAP-/] で, un-Basic 語 chase の「追い求めてつかむ」から類推はできようが, Basic 語では keep, have, chief, receipt などとも根元でつながっている。PIE 語根 /KAP-/ の /k/ の音素は [h], [tʃ], [s] などの音声にも変異し, un-Basic の cap (帽子) をはじめ, スペリングは c と

もなり多くの英語を生み出した。本来の原義の把握は語感を鋭くする。たとえば On the wet floor I was in these trainers for purchase. の意味は何か？ ネイティブにはすぐ理解されるが、「私は濡れた床（ゆか）で滑らないようにこのスニーカーを履いていた」の意味となる。原音と原義の関係から、この場合 purchase が「滑り止め」の意味で理解されることとなる。同時にこれはネイティブの「語感」からくる解かり方（reasoning）でもあろう。

## あとがき

伝統的に日本で入門期における英語習得では、国から検定本が与えられ日常的にそれがよりどころとなっている。そうであれば学習者の中で、その検定本の各課の新出語が自分でも音声記号で表記できる状態で、ネイティブの録音モデルをたよりに（録音室での朗読調の英語で、実際の音環境のもとでのライブの英語とはテンポも呼吸法も違うが、ともかくはよい）、これを3桁の回数になるまでも意味を理解しつつ、ひたすら仏僧の経典読みのごとく音読し、算術でいえば九九並みになるまで唱えることに集中した者が100% 必ず群を抜いた勝者になるはずである。構文法の魂が確実に入るわけである。あとは唱えたものの筆写である。検定本さえ不消化の状態、諸々の教材など他のものを取り込んで負担が増すとともに、焦点が定まるよりもぼけてくる面がある。英語以外に他の科目もある。入門期の英語は、まるで検定本だけに集中し、これを真に消化するのが要領が良い。

ただ、「まえがき」や第一節で言及したが、Basic 語彙本体の850語を Panoptic English として、すなわち850語の語彙目録を英語の panopticon（パノプティコン）として、まずは手早く把握してしまう（‘the Basic words’ first とする）ことなどはその後へ向けての展望がもて、学ぶ上での見通しがもてることにもなる。山の麓（ふもと）ばかりを見ているのではなく、先を見越し早めに頂上を見てしまうということである。

個人的には筆者は、いわゆる入門英語には検定本を「読み上げながら解かる、解かりながら読み上げる」徹底的音読法以外に、特別には関心があるわけではない。英語は入門期だけで終わるのではない。事実上はその後に重要となる「学び方」に筆者は関心がある。実際問題として、入門期以降に必ずぶつかるのが、一般の英語を広く「理解する」ための「語彙力と語法」の問題であろう。本稿ではこのあたりに照準し、入門期に習得し既知となっている基本語〔ここでは850語を本体とする C. K. Ogden 選定の Basic 語彙〕をまずは手掛かりに、その原音と原義の関係から、そして文脈から未知語の意味を「類推」により察知する手法を示唆的に説いた。入門期以降の、語彙力の必要となる頃からの英語の学び方で有益なものとなろう。

明治時代に森鷗外や夏目漱石が、etymology（語源）から英語の語彙力を身につけたことが知られているが、特に鷗外は医学を学ぶなかでドイツ語・英語の医学用語をギリシャ語やラテン語などを介し、まさに比較言語学的手法で手早く身につけたということになる。音読では、やはり明治時代の野口英世などは徹底的なこの実践者であったようである。

日本のいわゆる進学校での学び手は目的意識も高いわけであるが、英語も教え方そのものよりも学び手の志の高低か低いかにかかっている。教授法理論の実践は教育となり用心も必要で、あまり身振り・手振りを交え、感情的に教示されると学ぶ側は洗脳される。第二節の例3) で mesmerize を見たが、mesmerism の混入には注意が必要で、さりげなくサラッと扱われるのがよい。英語は教室空間で限られた時間、どれだけ教えられてもそれが即、身につくものでも

ない。つまるところ学ぶ側自身の志であり、みずから要領（コツ）を発見していくこととなる。スポーツの分野でも同じはずだろう。たとえば大相撲の歴代横綱は土俵で師匠からすべて教えられたのではなく、みずから試行錯誤で稽古を積むなか勝てる技（というよりも負けない技）の1つのコツを体感で発見したのだろう。こういう潜在的なコツなるものは言語化して示すことは事実上不可能で、発見していくものとなる。いずれにせよ、教授法理論の実践効能評価は主観的・感情的印象ではなく、実験群と非実験群に分けるなど客観的データを取り、それを基に論文等で科学的に検証・立証していくこととなる。

第一節冒頭で触れたが、古英語・ギリシャ語・ラテン語などの語形で示される英語の語源に関する断片的解説書は多く存在する。しかし、さらに歴史を遡（さかのぼ）った発生源としてのPIE（印欧祖語）の音形・語根から体系的・総括的に示す文献は限られている。推定から復元されたPIEの語根音形は文献により相違や、目下不詳のものなどがあるが、それも含めて現時点での一説だと考えてよい。Shipley, J. T. (1984) と Watkins, C. (2011) の専門文献も両者を対照すると多少異なる部分も多々あるが、それがまた異形として参考となる。Basic語彙もPIEの簡素な語根音形から本来の原音と原義を押さえ、英語全体のlexicon（レキシコン）のなかに位置づけていけばよい。

Basicなどを介し英語の語句整序法、すなわちsyntax（構文法／統語法）の基本はマスターしたとしても、広く英語に関わっていく限りはさらに語彙力増強（vocabulary buildup）や各語の使い方としての語法（usage）の問題はつきまとう。研究としては日常的な仕事（daily routine）として追究されればよい。明治時代などとは異なり、航空機など輸送手段が身近な今日である。簡単に世界各地へ出向き実地の比較言語学的な調査（フィールドワーク）もできる。たとえば、地中海からヨーロッパとアジアの境界をなすボスポラス海峡を抜け、印欧祖語民族が最初に居住したとされる黒海の肥沃な北西部あたりから、はるかインドへ向けてのルート（route）に思いをはせれば、ある種のロマンも感じられよう。

routine（日常なこと）と言ったがこれはラテン系で、古フランス語を経由している。また、route（ルート・道筋）とも言った。この2語は同系語で「旅で（日常的に）よく通る道」が共通な原義である。routine, routeをShipley, J. T. (1984)はPIE etymonを/REUP-/とし、第二節での例5)の関連で触れたrobe, robなども同系語としている。道での略奪品としての衣類、略奪行為、またその日常性がここからも確認できる。なお、rape（強姦）はrapid（速い）などと同系でPIE etymonは/REP-/が定説であるが、根元ではrobe, robともつながっている可能性がある。rapeも元は「略奪」の意味であった。

さらにまた、輸送手段としての航空機に関して触れたが、機内でわれわれが世話になるのが英語ではかつてのstewardess、日本語では「スチュワーデス」で、今日のflight attendant [</TEN-/(&rightarrow;attention, etc.)]である。このstewardessはゲルマン系で、PIEの「ねじ曲げること」を意味する語根音形/WERG-/(&/WERS-/)などから来たことが解かっている。そしてこの発生源から上で見たBasic語のwormや、他にやはりBasic語のwire, warなど多くの英語が誕生した。phoneme（音素）/morpheme（形態素）的にはstewardessは[ste (=pig) + ward (=guide) + -ess (=female)]と要素分解もできる。すなわち、ルーツとしての原義「ねじ曲げること」から、OE: Old English（古英語）の時代にstewardessとなったが、実はこれは「豚小屋の女性番人」の意味であった。

英文の意味を根元から深く理解するため、一般の既知の語（既知と思っている語）も Basic 語を軸にすべて発生源に立ち返り洗い直していくのである。本稿でもいくつか例を示したが、こういうものに慣れると必ず音感と語感が身につく、自信もついてくる。第一節で提示した例は考え方を知ればすべて正解できるところは数学的でもあると考えるが、人間ではなく、仮に人工知能（AI: Artificial Intelligence）のロボット（人造人間）に学ばせ語根照合（EC）で択一的に推論させるとすると、果たしてどこまで正解できるだろうか？ 人間に勝るだろうか？ 広く一般の英語語彙の意味を根本で「理解する」ため、Basic 語彙の root sound / root sense（原音／原義）と照合しつつ、そして可能な限り PIE（Proto-Indo-European）の etymon（語根音形）まで遡ることで音感と語感を獲得する lexeme（語彙素）の追究手法には、常に発見があり、発見の連続となる。英語の学びのなかでの醍醐味である。英語に関わる限りは注目される必要があるはずだろう。

### 参考文献

- Davies, P. (ed.) (1970) *The American Heritage Dictionary of the English Language*. Dell Publishing Co., INC., New York.
- 後藤 寛 (2007) 「BASIC ENGLISH のレキシコン：旧語表から新語表へ」研究紀要 No.15, pp.1-11, ベーシック・イングリッシュ学会
- 後藤 寛 (2016) 『必携 最小限の語彙力で英語を読み、聴く方法：基礎語からの類推』（*Getting the Root Sense of the Basic Words of English*）松柏社
- Kipfer, B. and Chapman, R. (ed.) (2001) *Roget's International Thesaurus*. (6th edition) HarperCollins, New York.
- Lockhart, L.W. (1987) *Basic Picture Talks*. The Hokuseido Press, Tokyo.
- Shipley, J.T. (1984) *The Origins of English Words: A Discursive Dictionary of Indo-European Roots*. The Johns Hopkins Univ. Press, Baltimore.
- The Bible in Basic English*. (1949) Cambridge Univ. Press, London.
- Watkins, C. (2011) *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*. Houghton Mifflin, Boston.

# plain English について

相 沢 佳 子

plain English とは一般には「平易な英語」のことで Basic English もまさにこれに相当する。ただここでは主に英語圏での明確、簡潔な分かりやすい英語の総称で、特に政府の公式文書などに関係したものを指す。最近米 Trump 大統領が次々に出す大統領令が波紋を投げかけているが、この「大統領令」で思い出されたのが Carter 大統領の発した plain English への要請である。この運動の始まりは 1950 年代英国では Gowers<sup>1)</sup>が、アメリカでは Flesh<sup>2)</sup>がこれを提唱して本を著した。1970 年代には英米共に消費者グループなどが法律や政府の文書が難解だと批判し、英語を plain にとの要求からこの運動は大きく広がっていった。Basic にもかかわるので以前から関心はあったが、今回はこの plain English について Basic の立場から次の 3 点を論じていく、(1)この運動はどう進展して行ったか、(2)内容はどのようなものか、(3)私たち非母語話者にどうかかわるか。

## (1) 米英における plain English 運動のあゆみ

先ずアメリカを見てみよう。アメリカは移民の国でもあり、英語を充分理解しない人も多く、1950 年代 Flesh<sup>2)</sup>ら公の文書が一般の人には難解で何とかしなくてはと思う人もいた。1970 年には Nixon が官報を平易な英語でと政令を発した。1978 年、先に述べた Carter (民主) が次のような大統領令に署名した。連邦政府の出す諸規則を費用削減にも効果的で、国民に理解しやすいような英語で書くようにと。教育省はこれを支持し、そのための研究開発予算を組んだが、一般にはこの広がりあまり見られず、出版物を平易にした政府機関は少なかった。はっきりした規定がなく、また今までのことば使いを急に変えるのは難しかったようだ。次の Reagan (共和) はこの命令を廃止し、英語簡素化はしばらく減速した。しかし Clinton (民主) が 1998 年簡素化を再び奨励し、これを政権の主要な率先事項と位置付けた。新しい規定は全て plain English でと正式に義務付けた。その内容は①理論的に整理され読みやすく、②専門用語を最小限に、出来るだけ日常語で、③ you など人称代名詞を使い、④能動態で、⑤文は短くと。この運動は政府機関、法律関係だけでなく企業などにも広がった。

今世紀に入り Obama も公式文書を易しくと The Plain Writing Act of 2010 に署名した。これは正式な法律で明確な公共のコミュニケーションを促進する事で政府機関の能率、説明責任を推進した。2013 年には災害時など外国人のため、また観光客用の冊子や看板なども原則的に plain English でと義務づけた。New York などいくつかの州でもこの運動は見られた。City Bank は消費者契約を plain English に書き変えると公表し、米国証券取引委員会もガイドブックを作り米企業に plain English を使った情報開示を義務づけた。また弁護士を目指す人は law school で plain English を学ぶようになった。

1995 年にアメリカで始まった Plain Language Association International (PLAIN)\*は国際的機関となり、この支持者と実践者ら会員は 20 ヶ国以上に及ぶという。10 の言語について伝達が明確に行われているか、政府がいかんこれを履行しているかを観察、調査している。2017 年度の活動として 5 月には調査の workshop がワシントンで、9 月には国際会議がオーストリ

アで行われると発表している。また2008年にはCenter for Plain Language\*が結成されこの運動を始めた。plain Englishでの文書などにClear Mark賞を出している。このような運動のせいか大統領、特にTrumpの英語は実に易しい。King牧師の'I have a dream'で始まる演説もplain Englishである。

次にイギリスをみてみよう。すでに14世紀の頃にChaucerはplainに話すことできちんと理解されると登場人物に語らせている。先のGowersは平易英語の手引書として1954年に*The Complete Plain Words*<sup>1)</sup>を出版した。これは後で見られる様々な指針の大元になった。ただ幼稚な英語との反論もあり、また法律家など権威主義者からの反感もあった。それを打破する草の根運動がおこった。Cutts<sup>2)</sup>らは1979年にPlain English Campaign\*を創設し、現在もNPOとして政府とも連携して文の校正サービス、研修など活発に活動している。平易な英語を使用している団体や個人にCrystal Markを与え、アメリカの大統領らも受賞している。1983年にはClarity\*という法律文の平易化を求める団体が結成され、国際的networkもあり50カ国からの会員が政府税法をplain Englishに書き換えた。政府も80年代から積極的にこれに取り組み、82年には各部署に表現様式を明確にするよう白書を出した。Thatcher、Major首相もこれに賛同、小さい政府実現の行政改革の利害が一致したからか成功している。当時先進国である英国でも識字率は未だ高くなく、文書の半分くらいしか理解できない人々も2割以上いた。2005年のLondonの同時爆発テロの調査でも、救急隊は常にplain Englishを使用すべきと勧告を出した。

英米でのこの運動の背景を考えてみよう。英国では17世紀ごろそれまでの古典的世界重視から合理性を重んじる科学的知識を求める新時代に入り、ラテン語などから自分たちの国語へと移って行った。そしてその国語が役に立つのには国民が理解できることが必要だった。一方米国では近年個人の権利が重んじられ、利益に関わる公共の情報に欠かせない。平易なstyleによっていかに情報を読み手に理解させるかが重要とされた。両国ともこの運動が広がりだした70年代はまさにグローバル化の流れの中で、個人の自由復元が奨励された時期でもあった。他方政府介入、管理体制は生じるが、市民が政府からはっきりした情報を受ける権利に値すると思われる。

plain Englishとしての活動は英米が主だったが、近年どの言語にも使えるようplain Languageと称されることが多い。オーストラリア、カナダなどだけでなく、スエーデン、オーストリアなどヨーロッパで、またアフリカ、メキシコなどでも政府が奨励し公文書などでこれを始めた。以上みてきて、同じ平易な英語を目指したBasicと比べてもこれが非常に成功しているのは政府や企業など国をあげての推進活動となっているからだろう<sup>3)</sup>。ちなみに日本ではどうだろうか<sup>4)</sup>。1995年阪神・淡路大震災以来外国人支援の災害対策用に平易な日本語の必要性が認められてきた。しかし平時でも今や在日外国人、外国からの旅行者も増えてきて法律など公文書をはじめ、契約書、保険書、保証書、薬のラベル、注意や指示書、冊子、看板その他平易な日本語での情報は必要だ。さらに日本人でも漢字や外来語、専門用語の多い複雑な文は理解しにくい人も多い。このような国語の平易化への運動は国としても民間からもあまりは見られない。もっと積極的に平易な日本語を取り上げるべきだろうし、平易日本語を考える上でもこのplain Englishは参考になると思われる。

## (2) plain English とはどのようなものか

「易しい英語」と言っても Basic のようにどの語を使うなどはっきりした規則はない。母語話者なら誰でも理解できるような英語と言われている。Gowers や Cutts の本<sup>3)</sup>を始めいくつかの guidebook が出ているが、それらから先ず英語の用法についての指針を紹介する。

- 1) 文は短く、平均して一文 15~20 words 程度に。長い文になるなら文を分ける、リストにする。
- 2) 読み手に理解しやすいような語を使う。大げさな語、専門語や古めかしい語、性差別を表す語などは削りその代わりにより simple な日常的な語を使う。参考のため何頁かに渡り official な難しい語とそれに相当する plainer alternatives (より易しい代用の語) を掲げている。  
例) accordingly → so, concept → idea, concerning → about, deduct → take away, defer → put off, emanate from → come from, impart → give (pass on, tell), in receipt of (obtain) → get (receive), nonetheless → even so (however)
- 3) 本当に必要な語だけ使う。不要な語は削り短くすっきりした書き方をする。
- 4) 特に必要な場合以外は出来るだけ受動態でなく能動態を使う。動詞がよりはっきりして文もびったりする。
- 5) clearest, crispest, liveliest (最もはっきり、きびきびした、活気のある) 動詞を使う。動詞を名詞化して be や have などの動詞と一緒に使うのは有用だが、使い過ぎはよくない。  
たとえば have sight of → see, have a direct effect on → directly affect, make a resolution → resolve, carry examination → examine など後者の方が引き締まる。
- 6) できるだけ肯定的に述べる。not だけでなく un- や in- の否定の接頭辞の付いた語や except, less than などでもできるだけ使わない方がよい。特に二重否定で not unless などは only 一語で。
- 7) 人称代名詞の使用, you など語りかけると読み手に親しみを持たせられる。
- 8) 抽象的な語は出来るだけ避けて具体的な語を使う。
- 9) 主語、動詞、目的語はこの順で出来るだけ近くに、離れていると理解しにくい。

ただこのような指針に対して実際の good writing と相入れない点もあるとの指摘もある<sup>6)</sup>。

以上は主に英語の用法に関するのだが、文作成について手引書などは以下のように述べている。

文章は読み手が重要な情報を素早く把握できるようよく準備して構成する。それには

- 相手がどのような人かを知り、相手を意識して語りかける。
- これから知らせようとする情報をよく知っておくこと。
- 一つのパラグラフには一つの情報だけを盛る。
- 大事なことは相手にすぐ伝わるように、結論、主要な点や概略を先に、根拠や説明などの細部は後におく。
- 適切な理論構成で分かりやすくはっきり表現する。
- 説明的記述よりポイントを図表、箇条書きなどで示す。
- 文書のデザインを考える — レイアウト、表題や見出し、空白部分など。

- simple というのは情報を削るのでなく、複雑な情報を単純に見せること。
- 伝える情報が相手の行動に結びつくことが重要として—読み手が重要な情報を見つけ、それを理解して、その理解に基づいて適切な行動が出来ることに主眼を置く。  
さらに読み手に関する指針もある。
- reading は字句の裏の内容を見抜く。
- 読み手はそれぞれの独自の基盤、知識や経験から文を是認する。
- 読みやすさとは文と読み手の相互作用の効率によって決まる。
- 読み手には統語上の予測が深くしみ込んでいる。
- 読み手には信頼を促す。

ただこれらはあくまで指針であって規則ではない。書く時や話す時は自分で考えて plain な英語にしなくてはならない。各州の条例もさまざま New York のはごく大ざっぱだが、Connecticut 州の決まりは具体的で、文は 22 語以内、一語は 1.5 シラブル以内、活字の大きさは 8 フォント以上とか細かく規定している。

私たち日本人は一般に英語を書く時、立派に見せたいと思うからかつい大げさな語を使いがちになる。plain English は日本なら中学 3 年程度の英語で十分と言われている。英語や文構成に関する上記の様々な項目は私たちにも参考になると思う。ケリー伊藤<sup>7)</sup>はこの plain English を使って英文指導をしている。

### (3) 外国人にとっての plain English とは

この plain English は主に英語圏で一般市民（移住民も含め）のために唱えられてきた。ただ現在英語の使用は外国人、つまり非母語話者の割合の方がはるかに多く、そのためにも plain English 「やさしい英語」は外国人にとって極めて重要である。確かに (2) の最後に述べたようにこのガイドラインは私たちにも活用できるが、一般には非母語話者にとってこのような大ざっぱな指針だけでは十分でない。もっと具体的な指示が必要である。英語の難しさは語彙の多さと綴りと音の不規則さだと言われている。ばく大な語彙の中で基本的な平易な語を提示する必要がある。

外国人への「やさしい英語」または入門期の英語の試みとしては、長い歴史を持つ Basic English、今世紀に作られた Globish や Basic Global English などがある。plain English と対応して見直してみよう。

- ① Basic English の最大の特徴は語彙の制限で、わずか 850 語（動詞は 16 語）で一般的なことは表現できるということ。たとえ物の名前を知らなくてもその内容をくだいて言えば通じる。日本語でも「分ける」ことは「分かる」ことでもあり、意味を分解すれば基本的な易しい語で表せる。代表的な例にあげられる disembark は get off a ship と分解して言えるように。これは英語が分析的な言語だからこそ可能で、同じ印欧系でも他の言語では不可能である<sup>8)</sup>。いかに考案者 Ogden がことば、とりわけ英語の特質をよく生かして Basic を考案したか感心する。しかも高度に系統だった組織となっている。

plain English と比べてみよう。難しい語の代わりに易しい語を使うこと自体共通である。両者とも一つの語で言うことを別の語で表すという代用の原理に基づいている。大げさな役人ことばを易しい語に置き換えた表には Basic words が多く見られる。文も Basic では

基本的動詞が単純、明快で規則的文体を作り上げ、plain Englishが目指す簡潔な文である。ただplain Englishの指針の中で相入れない点もある。出来るだけ能動態でとしているが、Basicでは動作名詞に-edをつけた形は受動態ではないが形容詞として大変便利である。またhave an effect, make a resolutionなども使いすぎない様注意しているが、Basicでこの「基本動詞+名詞（主に動詞からの派生名詞）」は動詞の少なさを補う大切な役目を果たしている。普通英語でもこの用法は現代英語の特徴でもありよく使われている（注6参考）。

時代に応じて新語も必要だし、私としては850語に厳密にとらわれなくてもよいと思う。それでもBasicは英語学習には大変有効である。日本人はつい日本語と英語を1対1で結びつけがちだが、その弊害が避けられる。基本的little wordsは文構成に極めて重要だが正しい用法はなかなか身につかない。Basicでその使い方に慣れることはすばらしい。日本人は語彙と文法の知識は十分あっても実際にそれらを使えないと言われている。outputの経験が少ないからだろう。Basicは発信力をつけるのに大変有効だ。このplain Englishもその点では同じである。なお現在もBasicを利用しているものがある。Simple WikipediaはBasicに基づき、およそ2,000語で、一般に短い文で基本的情報のみを表現している。記事を書く時はBasicの語彙を使い短文でと要求している。アメリカの国営放送VOA（Voice of America）の外国人向けspecial Englishは1,500語しか使用していないが、これもBasicの影響が大きかったと言う。

- ② Globish\*はフランス人のJ-P. Nerriereが国際共通語として外国人が旅行やビジネスに使えるように簡易化した英語。完璧な英語でなくても相手に理解されればよいとしている。語彙はVOAのspecial Englishの1500語を主としている。文は短く、文法は易しく、関係節、受動態、比喩、慣用句などはできるだけ使わない。身振りや視覚的補助などの利用も勧めている。日本でもこの関連本は何冊も出ている。
- ③ Basic Global English\*ドイツのJ. Grzegaが開発、世界的コミュニケーション能力を速やかに獲得する事を目指している。基本語彙として750語と個々の必要に応じて250語が使える。ただこの自由に使える語は相手に通じなくてはならず選ぶのは大変だと思う。相手に対する寛大さ、共感などpoliteness strategiesも含めている。小学生用から成人向けまでテキストが作られている。

②、③共に現在はかなり広がっているが、その元にはBasicのようなことば、英語に対する洞察はみられない。ただ語彙を制限し、文も容易にただけである。plain Englishも含め同じ平易英語ではあるが大きな違いはBasicの背景の理論である。易しい英語を目指して作られたが、その源にはことばのあいまいさが思考をあいまいにして邪魔をする（word magic）という考えがあった。Ogdenはこの問題を考え、結果として物事を分析的にとらえることでこの弊害を乗り越えるように考案されたのがBasicなのである。Richardsはこれを“outcome of a unique piece of analytical lexicology”（比類のない分析的語彙研究の成果）<sup>9)</sup>と言っている。明確な思考のために情緒性を排し、fictionに注意し、出来るだけ具体的に明確なことばを使い、結果的に明瞭で平易な英語となった。Basicも平易な英語を目指した試みの一つあるが、plain Englishが直接にBasicを考慮に入れた様子はない。ただplain English運動の先駆的試みとしての価値はあると思われる<sup>10)</sup>。

本文中\*(星印)をつけた plain English (Language) 推進の機関などは net 上に homepage が出ていてその活動などが詳しく紹介されている。なお現在は net で様々な情報が得られるが、The Times in Plain English は外国人向けに Times の記事をやさしく書き直している。余り知られていないようだが英語学習者にはこれも利用して欲しい。

## 注

- 1) Gowers, E. (1954, 1987) *The Complete Plain Words*. Penguin Books.  
彼は政府の役人でもあり政府機関の官僚的用語を改善したいと思っていた。この書はそれまでの *Plain Words* (1948), *The ABC of Plain Words* (1951) などを合本したもの。難解な役人ことばを分かりやすくすることが出発点だったが、ベストセラーにもなり、その後も英語の変化に伴い何度も改定され、2014年の最新版は彼の曾孫によって改定されたとのこと。60年以上読まれ続けてきたことは、この本が英語の複雑さに対する古典的ガイドとして高い価値を持つことを示している。また彼は古典的な英語用法の書 Fowler の *Modern English Usage* (1926) を1965年には改定している。
- 2) R. Flesh はオーストリア生まれのアメリカ人で、作家でもあり readability についての専門家で、その test なども開発している。はっきりした効果的な伝達が必要と *The Art of Plain English* (1946), *How to Write* (1951), *A Guide to Plain English* (1964) などを著し、アメリカでの最初の熱心な plain English 提唱者だった。
- 3) Cutts は Marha と共に plain English の Campaign を立ち上げたが後に次の本を著した。  
Cutts, M. (1995) *The Plain English Guide: How to write clearly and communicate better*. Oxford University Press.  
ここでは例文とそれぞれ plain English に直した文をあげ具体的に解説している。彼は plain English を読み手志向として、clarity と honesty を重視した。
- 4) 角知行 (2016) 「イギリスにおける「やさしい英語」運動」『天理大人権問題研究室紀要』1-16。2016 彼は上記の論文でこの運動についてかなり詳しく記述している。その中でイギリスにおける3つの英語平易化運動として plain English, Basic English と「綴り字改革」をあげている。それぞれ一時期注目を浴びたが plain English だけが順調に発展した。英語の綴りは問題も多く、綴り字改革は20世紀半ばにピークに達したが、改革案は議会で否決されたとのこと。Basic も戦前は30カ国で広く普及したが戦後は影を潜めている。
- 5) 庵功雄『易しい日本語—多文化共生社会へ』2016 岩波新書  
定住外国人も増え人材移動のグローバル化に対し、平時でも情報提供の手段として易しい日本語は重要である。ただ外国人だけでなく、日本人側も調整してこれを共通の言語とするよう提案している。
- 6) Huckin, T. N. (1991) "Prescriptive Linguistics and Plain English." in E. R. Steinberg (ed) *Plain Language*. Wayne State Univ. Press  
彼はこの中で plain language の指針の中にも実際の用法とは矛盾する点もあることを指摘している。事例として whiz-deletion つまり「which is などの省略は避けよ」と出ているが、実際には省略文の方がはるかに多いとコーパスを使って示している。また避けるように言われているが、Basic でよく使われる受動態や「動詞+名詞」も実際には多いことも付け加えている。

- 7) 伊藤ケリー『ケリー伊藤のブレイン・イングリッシュ講座』（2014） 研究社  
彼は plain English について単語、文レベルで解説し、この平易な英語で言いたいことを的確に表現できると言い、日本人にもこれを身に付けるよう勧めている。本だけでなく net 上でもこの plain English を使った英文指導もしていて添削など通信教育を行っている。
- 8) 相沢佳子 (2003) 「ベーシック英語の動詞制限について—他の言語と比較して」『研究記要』11. 1-7  
この中で仏、独、伊、スペイン、露語について同じ through Pictures シリーズ中の動詞を比較して、英語のみが少ない動詞で可能なことを証明している。
- 9) Richards, I. A. (1945) *Learning Basic English*. New York: W. W, Norton
- 10) McArthur, T. (1991) “The Pedigree of Plain English.” *English Today* 1991.1  
これは plain English 第一回全国大会での開会の辞を元にした論文で Basic にも言及している。



2016年夏セミナー（東京）

## 只管朗読のすすめ

國弘正雄 著「英語の話しかた」より

只管朗読ということばは、読者の方々にとってはおそらく耳なれないことばだと思いますが、読んで字のごとくで「ひたすら朗読する」という意味です。

私がこの只管朗読ということばを思いついたのは、鎌倉期における曹洞宗の開祖、道元禪師が、「只管打坐」ということをいっていることからです。道元禪師の説いた「只管打坐」というのは「ひたすら坐りなさい」ということです。（中略）

そこで私も道元禪師にならって、英語に上達しようと志ざされる方には、黙って朗読しなさい、ひたすら朗読しなさいと申し上げたいと思います。実はこの朗読ということが、英語にとって一番効果的でしかもお金のかからない、いつでもどこでも自分自身が主体的に場所なり時間なりを決めて行なうことができる、その意味では最も容易な方法であると思うのです。道元禪師は坐禅をさして安楽の法門といいましたが、私は朗読こそが安楽の英語上達への道であると主張したいのです。（中略）

ところでこの本を読んで下さっている年長のみなさんのなかには、朗読などというのは中学生のやることで、いい大人のできることではないという反論をなさる方もあるかもしれません。そんなこと第一気恥ずかしくてできないし、若いときとちがって効果もあるまいといわれる向きもあるでしょう。気恥ずかしいとおっしゃる方には、この国際化時代に英語ができないのと、声を出して読むのと、どちらがより恥ずかしいと思いますか、と申し上げます。

そして中学生ではあるまいし、馬鹿にするなどお叱りの向きには、意地悪のようですが、こと英語の表現能力に関するかぎり、みなさんはアメリカの中学3年生と比べれば、どうも歩が悪い、いやに日本の中学3年と比較してもあまり大差がなさそうだ、という点を remind してほしいと思います。

他方、効果の有無を疑われるみなさんに対しては、かつて私がこの方法のある年配の先生にあてはめてみて、大きな成果をあげた事例を紹介することにしましょう。（中略）大越先生は、お年は60を越えていらっしゃいました。しかも茨城県出身で、どちらかといえばことばの重い方だったわけです。近くイギリスに学会があり、その学会で小委員長をつとめなければならないが、しかし英語を話したり聞いたりすることが下手なので不安でしょうがない、なんとか國弘さん助けてくれないだろうか、ともちかけられたのでした。

そこで私が大越先生に「先生、私のいうことは何でもお聞きになりますか」と申し上げまし



た。すると先生は「何でも國弘さんのいうことは聞くから」と答えられたのです。

それではと、私は大越先生の英語の勉強のお手伝いを1週間に1回ずつすることになりました。

私はとにかくどんなものでもいいから、レコード付きの中学2年生のリーダーを2冊買ってきてくださいと申し上げたところ、先生はさっそく神田に行かれ、ある中学2年生のリーダー2冊とそれに付随するレコードを買って来られました。

われわれの勉強がどのように進められたかという、まず私が中学2年のリーダー、レッスン・ワンを声を出して一節ずつ読み、そのあと大越先生がつけて読み、そしてまた私が続けて読む、大越先生がつけて読む。毎週1回1時間ぐらいの個人授業でしたが、その間、私たちは徹頭徹尾、朗読に終始しました。

ところで先生は車で大学へ通っておられ、往復3時間ぐらいの時間があるということでした。そこで、私は、テープレコーダーにリーダーと外国人のレコードを吹き込み、それを毎朝毎晩学校の往復に先生がお聞きになれるようにしました。

そういう状態が約3カ月ぐらい続いたのでしょうか。くる日もくる日も朗読一辺倒でそれ以外の勉強らしいことは何もしなかったわけですが、ある日先生が知人を見送りに羽田に行かれたのだそうです。するとそれまでは全然耳に入らなかった空港の英語によるアナウンスに初めて気づき、しかも何をいっているのか実によくわかったとあって、子供のように喜んでおられたわけです。

そこで私も大変力を得て、その中学2年のリーダーを全部朗読を通じて仕上げてしまいました。そして別の中学2年のリーダーを買っていただき、それを今までと同じようなやり方で朗読し、ついに2冊目の中学2年のリーダーも上げてしまったのです。ついでに中学3年のリーダーにも移りましょうということで、同じような方法で繰り返し朗読しました。

考えてみれば、これは単調きわまる作業でした。私にとっても単調そのものでしたが、大越先生にとってみれば、もっとモノトナスなものであったにちがいません。しかし、これが、さしものご老体の、しかもどちらかといえば口の重い大越先生の英語の聴き取り能力と表現能力とを大幅に改善するうえに役立ったことは、間違いありません。

というのは、やがて学会に出席するために奥さんを伴ってまずアメリカに渡られ、サンフランシスコで観光バスに乗られたのだそうですが、その観光バスの案内が実によくわかった、おかげで奥さんに通訳することができて、夫として大いに面目をほどこしたとあって、それこそ子供のようにしゃいだお手紙をわざわざ送ってこられたのです。

やがて先生はイギリスに行かれ、学会で小委員会のチェアマンをなさったのですが、なかなかの議長ぶりであったらしいことを帰国後ご本人の口からうかがい、私も大いに面目をほどこしました。そして私の信念が誤っていなかったことも、確証づけられたのです。そういうわけで、私は「只管朗読」を是非みなさんにおすすしめしたいと思うのです。

さきほどもちょっと触れましたが、朗読というのは、自分自身で時間を選び、場所を選ぶことができます。人間には必ず1日のうちに10分とか15分とか、わずかな時間があるものです。そういうわずかな時間を上手につづり合わせて、そしてそれをある建設的な目標のためにつかうことができるかできないかということが、その人がある技術を身につけるかどうかを大きく決定してしまうと思うのです。

朗読の場合は疲れていても少しもかまわないのですから、疲れていて、とても難しいことを考える気分的な余裕はないけれども、寝るにはまだ早すぎるというような時間がありましたら、是非みなさん、これを朗読のために使っていただきたいと思います。その効果は期して待つべきものがあると、私自身の体験を通じて申し上げることができるからです。

それではいったい朗読のためにどういう材料を選んだらよいか、という疑問をお持ちになるかもしれません。それについて私は、内容的に言えば中学3年のリーダー以上のものである必要はない、ということをお断言いたします。よって、英語の基礎的知識を身につけるためには、中学2年ないしは3年程度のリーダーの英語を反復音読すればよい、ということになります。

もちろん英字新聞の社説であるとか、専門の書物などを朗読されるのも大いに結構です。私は、それが無用だといっているのではありません。しかし専門的な難しいものである必要はないので、中学2、3のリーダーで充分なのだとして申し上げているのです。

考えてみると、われわれが日常的に使う語彙や表現形式や文法形式といったものは、中学3年程度のリーダーのなかにすべて網羅されているとあって間違いありません。日本広しといえども、英語の専門家のなかで中学3年までのリーダーに出てくる英語が迅速に、ある程度の正確さで口をついて出てくる、あるいは筆から流れ出るといふ人は、せいぜい500人いるかないかであろう、というのが私の率直な感想です。

したがって、中学3年までのリーダーを決して馬鹿にしてはいけません。そこには、すべて英語の基本は網羅しつくされているのですから。

たとえば語彙ですが、現にオグデンとリチャーズの二人が作り上げた人口語としての Basic English というのは、850の単語で何でも一通りのことは表現できるのだという原則にもとづいています。中学3年までのリーダーには、文部省の指導要領によって850はおろか、1,300語程度の語彙がもられているわけですから、もう必要にして充分であるということがいえます。構文形式についても同じです。

ただ具体的なリーダーの選びかたですが、私の経験では会話体のこま切れ的な文章の多いものは、あまり朗読に適さないようです。(中略) 街に氾濫している会話集は、意外に役立ちません。というのは、それではなかなか身につかないからです。もっと内容の一貫したものを通して朗読することが望ましいのです。日本人の多くが日本語的な発想から脱しきれないのも、長い文脈で英語を話したり書いたりする訓練が不足しているからだといえます。その弱点を克服する道は、やはりある程度の長さで首尾一貫した英文を音読することだと思います。

國弘正雄 (1930-2014) : 文化人類学者、政治家 (元日本社会党参議院議員)。英語の同時通訳の草分け的な存在。アポロ11号の月面着陸を伝えるテレビ中継番組における同時通訳 (1969年) など有名になり、「同時通訳の神様」の異名をとった。のちに政界に転身。

◆◆◆東日本支部活動報告◆◆◆

(2015年8月～2016年7月)

■2015年

8月10～12日	夏期英語教授法セミナー	オリンピック記念青少年総合センター	
9月26日	月例会	目黒区勤労福祉会館	
	デモ	"Our Friend the Earthworm"	
		The Basic Reading Book 3 p.36	菅生由紀子
	トーク	「イメージから広がる多義語の世界」	小山田幸永
10月17日	月例会	目黒区中小企業センター	
	デモ	who, turn, push (EP 1 pp.58-59)	伴野 温子
	Basic	Basic English/400 General より (t-2, u, v)	
11月28～29日	秋のセミナー／月例会	オリンピック記念青少年総合センター	
28日	デモ	and (EP 1 pp.22-24)	黒瀬 るみ
	デモ	go (EP 1 p.29)	高原 秀明
12月19日	月例会	津田塾大学同窓会会議室	
	デモ	attempt (EP 2 p.39)	山田 静
	トーク	「ベーシックを通して知る英語の仕組み」	相沢 佳子

■2016年

1月17日	月例会	神奈川県民センター	
	デモ	doing (EP 1 p.77)	黒瀬 るみ
	Basic	Basic English/400 General より (w, y)	
2月6～7日	ベーシック・イングリッシュワークショップ／月例会	オリンピック記念青少年総合センター	
6日	デモ	"A Girl Who Went to Brazil"	千葉 洋子
	デモ	"Iceland — An island with the most beautiful views and persons living happily"	小林 由明
3月26日	月例会	オリンピック記念青少年総合センター	
	デモ	of (EP 1 p.26)	服部 正子
	トーク	「Basic English について」	黒瀬 るみ
4月9日	月例会	目黒区中小企業センター	
	デモ	put (EP 1 p.15)	高原 秀明
	Basic	Basic English/200 Pictured より (a, b)	
5月7日	月例会	目黒区中小企業センター	
	デモ	times (EP 2 p.83)	大野 晴美
	トーク	'500 Pictures for GDM Teachers to Copy' の使い方	新井 等
5月28～29日	GDM 発音ワークショップ	オリンピック記念青少年総合センター	

6月18日	GDM 公開セミナー 港区三田いきいきプラザ	
	1) 最初の授業	加藤 准子
	2) 動詞 give の授業	伊藤千津子
	3) 動詞 see の授業	唐木田照代
7月9日	月例会／総会 目黒区勤労福祉会館	
	デモ Which? (EP 1 p.48)	岡本美津子
	総会	

### ◆◆◆西日本支部活動報告◆◆◆

(2015年9月～2016年8月)

#### ■2015年

9月12日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ① which (relative) (EP 1, p.72)	河村有里子
	デモ② EP 2, p.133 3 コマ目	松川 和子
	Basic English 勉強会	片桐ユズル
10月17日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ① I, You, He, She, It (EP 1, pp.1-3)	上島 光代
	デモ② here, there (EP 1, pp.4-5)	麻田 暁枝
	Basic English 勉強会	片桐ユズル
11月21日	日本語を使わない英語の教え方 GDM 秋セミナー in Osaka 大阪市立総合生涯学習センター	
	(1) GDM による外国語の授業	
	(2) 模擬授業：① I, You, He, She, It ② here, there	
	(3) GDM の理論	
	(4) 実習 (トレーニング)	
	(5) アクティブラーニングで学ぶ関係代名詞の授業 (中学校)	
12月12日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ get 現在形 (EP 1, p.92.)	上島 光代
	Basic English 勉強会	片桐ユズル

#### ■2016年

1月31日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ① where (EP 1, p.38.)	麻田 暁枝
	デモ② As/, which..., (EP 2, p.134 4 コマ目)	此枝 洋子
	Basic English 勉強会	片桐ユズル
2月20日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ change (EP 2, pp.69-70)	山崎 典子

	Basic English 勉強会	片桐ユズル
3月19日, 20日	初級・中級セミナー in Kyoto / 月例会	ザ・パレスサイドホテル
4月16日	月例会	大阪市立総合生涯学習センター
	デモ①	what (relative) (EP 1, p.72) 松川 和子
	デモ②	let (EP 2, p.15) 上島 光代
	Basic English 勉強会	片桐ユズル
5月21日	月例会	大阪市立総合生涯学習センター
	デモ①	I, You, He, She, It (EP 1, pp.1-3) 河村有里子
	デモ②	here, there (EP 1, pp.4-5) 山崎 典子
	Basic English 勉強会	片桐ユズル
6月18日	〈GDM 初級セミナー〉	大阪市立総合生涯学習センター
	(1) GDM による外国語の授業	
	(2) GDM の理論	
	(3) 模擬授業：① I, You, He, She, It ② here, there	
	(4) 授業案作りとライブ『take の3時制を教える』+『take の導入 (DVD)』	
7月12日	月例会・総会	大阪市立総合生涯学習センター
	デモ①	with/will be (EP 1, p.37) 松川 和子
	デモ②	EP 2, p.233 workbook より 此枝 洋子
8月13日～15日	GDM 英語教授法サマーセミナー	国立オリンピック記念青少年総合センター

## ◆◆◆編集後記◆◆◆

今日は4月25日、北朝鮮の核実験が強行されるか否かを巡って世界が固唾（かたず）を呑んでいる。この4月は、翻訳原稿の最終の推敲と重なり、肩がひどく凝りマッサージ治療を数回受けた。翻訳は、英国国教会の総本山カンターベリ大主教（Archbishop）であったローワン・ウィリアムズ師による *Tokens of Trust* (2007) である。光栄なことに、著者に日本語翻訳版の序文を書いていただいた。先日、銀座にある教文館に原稿を送信し、今は、6月の公開講演会に間に合うようにYearbookの編集の最終段階に入っている。

同時進行で作業をしていたので、翻訳原稿の推敲の過程で、時折GDMのことが頭を過ぎることがあった。GDMをいわばmission（伝導）という観点で捉えることができると思うことが多々あった（こじつけだと誇られるだろうが）。GDMは、伝統的な教授法で悶々としている教授者には「福音」ではないか。また、勉強会、月例会、セミナーなどで活躍している人たちは、GDM普及のために「遣わされている使徒」のような存在ではないかと。振り返れば、1980年代のサマーセミナー（御殿場）には、毎回、100名近い参加者があり、ちょっとしたmovementまたは“GDM教”の大集会の感があった。一部の受講者の間では、吉沢美穂さんが「ご本人の意志に反して」まるで教祖のように見られていたように思える。多くの「使徒が遣わされ」、熱っぽい雰囲気があった。当時、3月にも神戸でセミナーがあった。

これまで様々な教授法が紹介され、うたかた（泡沫）のように消えていった。ウィリアムズ師は「キリスト教会は、これまで経験してきた諸々の問題にもかかわらず、見事なほどに強靱であり耐久力があることが分かった」と言っているが、この文の主語をGDMに置き換えてどこかで利用できる。また、彼は、「キリスト教は、概念としてではなく、為されることを通して理解される」と言っているが、同じことがGDMについても言える。そして、実践例が「証し」—tokens of trust—としてYear Bookをはじめ、いろいろな機会に紹介されている。誠に喜ばしいことである。